第７回熊本大学
東光原文学賞作品集

2015年3月発行
熊本大学附属図書館
Kumamoto University Library

◆ 大 賞 ◆

灰塵の記　　村元　新

◆ 優秀賞 ◆

御伽草子、橋姫の項。　　かわひらこ

我が親愛なるあなたへ　　伽　　音

昼間の星の陰で　　黒瀬　優真

第七回熊本大学東光原文学賞作品集

第七回東光原文学賞作品集　目次

館長のことば　熊本大学附属図書館長　大熊　薫／4
第七回東光原文学賞の公刊によせて

大　賞
灰塵の記　村元　新／7
（文学部文学科二年）

優秀賞
御伽草子、橋姫の項。　かわひらこ／32
（薬学部薬学科六年）

優秀賞
我が親愛なるあなたへ　伽　音／65
（教育学部小学校教員養成課程四年）

優秀賞
昼間の星の陰で　黒瀬　優真／85
（工学部機械システム工学科二年）

選考を終えて
岩岡　中正「今なぜ小説か――書き続けること」／123
高峰　武「錐のような作品を」／127
西山　忠男「なぜ小説を読むのか、なぜ人は小説を書くのか」／130

第七回東光原文学賞の公刊によせて

附属図書館長　大　熊　　薫

附属図書館は、平成二十六年度もその事業の一つとして、東光原文学賞のための作品募集を行いました。この事業の目的は、幅広く学生諸君に読書への関心をもっていただくこと、さらに日本語の文章を書く能力の向上を図ること、そしてこれを機に図書館を今以上に活用していただくこと等です。

集まった作品集の中から最もすぐれた作品を大賞として一篇、残念ながら大賞にまでは届かなかったが、それでもやはり素晴らしいと思われる作品を三篇選ぶことにしています。昨年度は優秀な作品が多かったため、例外として本来の三篇に加え、さらにもう一篇を加えることに審査員全員の意見が一致しました。しかし今年度は例年通り、優秀な作品四篇を選ぶに止まりました。私たちはこれら優秀作品の表彰を行うと同時に、この東光原文学賞作品集に掲載し、その名誉をたたえます。

前回は全ての学部から合計十九篇の応募がありましたが、今年度は合計十二篇と、昨年度を大いに下回ったことは残念でした。その内訳は次の通りです。

文学部（二年三篇、四年二篇）計五篇、教育学部（四年二篇）計二篇、法学部（無）、理学部

（一年一篇、二年一篇）計二篇、医学部（無）、薬学部（六年一篇）計一篇、工学部（二年一篇、三年一篇）計二篇

今年度も昨年同様、大学院研究科から投稿がなかったことはまことに残念なことでした。次回に期待しています。

選考に当たられたのは、西山忠雄先生（熊本大学大学院自然科学研究科教授）、岩岡中正先生（熊本大学名誉教授）及び高峰武先生（熊本日日新聞社取締役論説委員長）の三先生方です。十二月中旬に開催された選考委員会では、どの作品を優秀賞として選考するか、熱い議論が戦わされました。投稿作品全部をこれほど熱心に読んでいただいた先生方には、心より感謝申し上げます。

今回惜しくも選考に漏れた学生諸君、また今年度は応募されなかった方、来年度に向けてどうぞ今から挑戦の準備をしてください。楽しみに待っています。

ところで、最近の若者は読書をしないという批判をいたるところで耳にします。私もその批判はかなり当たっているのではないかと感じます。例えば書店に行っても若い人が立ち読みしている姿を見ることは極めてまれです。ましてや古本屋で学生が熱心に本をあさっている様子は見たことがありません。大学の近所にあった古本屋もいつの間にか無くなっています。「今や昔、古本屋なるものありけり」という文章が書けそうです。

人生は短いということを若い人が悟ることは無理かもしれません。しかし、自分の身の回りで、自分とは異なったいろんな考えを持った人、様々な経験をした人と直接出会って話をすることは困難だ、ということは頭では理解できるでしょう。そのような経験ができなくとも、それに代わる方法が一つあります。それが読書なのです。書物の中から私たちは様々な思想、体験などを学

ぶことができます。想像力をたくましくすることも可能になります。読書をとおして自分の人生を豊かなものに変えていくことができます。書物こそ人生の最大の師だと私は思います。

　ではどのような本がいいか、それは自分で探すしかありませんが、基本的には明治、大正あるいは昭和初期の小説や随筆を読めるようになることが大切ではないでしょうか。それらの書物をとおして日本語がこれほど美しかったのかという感動を味わってほしいものです。そこから自分が書く文章も次第に気品のある日本語へと変わっていきます。文章作成能力は格段と進歩します。

　どうぞ読書の大切さを理解してください。そしてこの東光原文学賞に応募して欲しいものです。審査委員の先生方もそのような作品を読むことで、必ずや感動を覚えることでしょう。皆さんの健闘を祈っています。

上段：高峰　　岩岡　　西山
下段：石本　　松岡　　大熊　　具志堅　　高嶌

第七回東光原文学賞大賞受賞作品

灰塵の記

村元　新

正人は慟哭した。他にできることなどないのだとばかりにただ落涙した。それでも兄の遺したものを濡らしてはならぬと、頭の中のわずかに冷静な部分が叫んでいた。

※

春と夏の渡しの季節、その気温はやたらと気難しい。いまだに着るよう言われている黒の学生服をだらしなく羽織った修治は、気だるげに人ごみをかきわけていた。上からは太陽、周りには人。袖のすり切れた学生服には熱がこもっている。すでに遅刻に入る時間で、居心地がいいとも言えない学校にいる方がいくらかましだろうと思えるくらいにはげんなりとしていた。

並の人間よりはいくらか大きい体格をしているので、邪魔に思えども人ごみに押されることはない。迫る電車の時間に内心焦りを覚えつつ修治はふと目の前の背中に目を止めた。ふらふらと不安定に揺れるそれは、改札を目指してただ時間に間に合おうと足を急かす人々からは切り離さ

れて見えた。
　足を緩めかけた修治の背に人の塊がぶち当たった。さすがに踏みとどまれずによろめくと、その拍子に例の背中へ右半身がぶつかった。糸の切れた人形よろしくそのからだが地に崩れていく。しまったと舌打ちをした頃には、修治の歩調を乱した集団は二人の横をすり抜けてすでにここにはなかった。修治は背中の主――男だった――の肩へ触れる。薄くて骨ばかりのそこは、何故だかいやに熱かった。立てるかと問うと彼は小さく首を横へ振った。放っておくこともできないので、修治は男の腕を取って無理に立たせる。彼の芯のないようなからだを支えて人の流れを外れると、途端に幾分か涼しい風が首筋を撫でていった。
　駅の休憩所まで男を助けて歩いた。気温に相応しくなく震える肩に学生服を着せかけてやって、修治は自動販売機で手に入れたペットボトルの水を差しだしてやる。小さく喉を鳴らしてそれを飲んだ男は色の悪い顔を向けて修治へ礼を述べた。
「体調が悪いとどうにも駄目ですね」
　タクシーでも捕まえて帰りますと彼は言う。止した方がいいと修治は言葉少なに返した。この時間帯は運転手が休憩をしているためタクシーはなかなか見つからない。立つこともやっとの者が長く居られる日差しでも気温でもないのだ。送っていく、と短く言うと男は少し目を伏せた。
　住所を聞いてバスで向かった先は修治の家と同じ方向だった。自宅を通り過ぎてさらに十分乗ったところで下車した。男の鈍い歩みに合わせて十五分で、彼の家だというところへ着いたらしい。鄙びた造りの日本邸宅だった。江崎と表札のかかった玄関を通って、引き戸を開けると、戸の開

く音を聞きつけたのか奥から人がやって来た。ぐったりとした様子の男と修治とを比べて見て、何が起こったのかだいたい把握したらしい。一度奥へ戻って、それから男を引き取って家へあがっていった。残された修治はもう一人やってきた女性に案内されて客間と思わしきところへ通された。かなり裕福な家庭なのは部屋の造りでわかる。よく冷えた茶が出されたので、それを飲んで漫然と待った。部屋の内装を見るなりして時間を潰していると、人が呼びに来た。あの男が呼ぶようにと言ったらしい。だいぶよくなったのだろうか。

呼びに来た人の後に続いて足を踏み入れたのは庭に面した和室だった。縁側にほど近いところに布団が伸べられて、そこに男がいる。彼は淡色の浴衣に着替えていた。半身を起こしていて、修治が来たのをみて顔をほころばせる。

「江崎和寿と言います。自己紹介が遅れて申し訳ない。大したお礼も差し上げられませんが、どうぞゆっくりしていってください」

「別にいいんだ」

修治は不愛想に言う。愛想は決していい方ではないのだ。そのせいか学校でも孤立しがちなのである。男――和寿は布団の隣に座布団を持ってきた修治をじっと見つめてきた。変に透明な視線をしている。世間を知らない赤ん坊のそれによく似ているだろうか。修治はしばし口を閉じたままでいた。

「……今日は、どうしたんだ」

沈黙も長くは続かなかった。口を開いたのは修治だ。そのままでいれば、和寿はいくらでも黙っ

ていそうだった。あまり良くないようだったらさっさと退去するつもりでいる。顔色は先に比べれば随分とましだが、やはり健全な人間のものではない。
「からだはもともと悪くて。今日は少し調子が良かったものだから、外出してみようと。――お名前、存じ上げませんがあなたも別のところへ行くのだったんでしょう。お引止めしてすみません」
「岩波修治だ。……学校に行くところだった。でも、もういい。あそこはすきじゃない」
修治の言を聴いていた和寿は目をしばたく。彼の言うことがよくわからないというような風に見える。居心地が悪いのだと言ってみても、それでもなお首を傾げている。
「私は、中学までしか学校に行っていないもので。居心地が悪かろうと通えるのならばそれがうらやましい。普通のからだをしていれば高校にも通えたのでしょうが、難しいものです」
「それは、すまない」
和寿はゆるく首を振る。彼は本当に気にしていないのだと己の言いようをわびた。声音に暗さはないが、修治はその語尾に入り混じった諦念のようなものを感じ取った。長患いがそうさせてしまっているのか。修治は色の褪せた畳の目に触れる。ここに布団を敷いて長いのだろう。擦り切れたそこに彼の積年の感情をはかり取ることすらできそうだった。
「――差支えなければ、あなたのことを話してください。私にお客があるのも久しぶりなんです」
修治はゆるりと目を上げる。真白い掛布の上に病人の手が乗っている。日に当たらない皮膚はその下の血管が透けるほどに薄い。こちらに向けられる目には先までは見えなかった期待がのぞ

いている。裏切って何も言わないのも酷な気がした。
「話せるようなこともない。つまらないことばかりだ」
「構いませんとも。家族以外の人と話がしたかった」
和寿は喜色を浮かべた。たかがそれくらいのことと捨て置くこともできないで、修治はとりあえず口を開く。自宅がこのあたりにあるのだというところから話を始めることにした。

※

うだるような暑さの日が続く。学生服の上着はとうの昔にクローゼットの奥へ追いやった。白い半そでのワイシャツに日差しを照り返しながら、強い緑色の下をゆっくりと歩く。
学校は昼で引けてしまった。やることもみつからず、かと言って家にそのまま帰る気にもなれないで気が付けば自宅の前を通り過ぎていた。こうなれば足の向く先は江崎邸だ。ふた月ほど前に知り合ったあそこの長男、和寿とは親しくなってたまに足を運ぶようになった。彼も修治の訪問を心待ちにしているようで、訪ねていくといつも口の端に笑みを乗せている。聞けば修治より二つばかり年嵩らしい。あまり世情に詳しくないせいか少し幼く感じる時があるが黙り込んだ横顔は実際の年齢より遥かに上に見える。
訪いを入れると顔見知りになった女性が引き戸を開けた。彼女は使用人として雇われている者の一人らしい。修治の顔を見てすぐに目的は察したようだ。和寿の部屋まで案内すると、彼女は

下がっていった。茶を淹れに行ったのだろう。
話し声がしたので、のぞいてみると畳に直接座り込んだ和寿の他にもう一人いた。修治の気配に気が付いたのか、その人物が肩越しに振り返った。顔立ちがどことなく和寿に似ているか。
「いらっしゃい、修治さん。ああ、これは弟の正人です」
「そういえば、会ったことはなかったな。岩波修治だ」
手短に挨拶を済ませて、正人とか言う少年の隣へ座った。初めて会う相手には口の重い修治だが、正人にはするりと言葉が出た。和寿と似たところを認めたからかもしれない。制服を着ているところから見るに学生なのだろう。ふと目をやった左胸のところに校章が縫い取ってある。自分と同じものがあるのに気が付くのはそう時間はかからなかった。
「一年生か」
「……はい」
修治の通う高校の校章は、縫い取りの糸の色で学年がわかるようになっている。購入の際はいちいち面倒だが一年生からすれば誰が先輩にあたるのかわかるので助かっているという。
「体育祭の練習とか、始まったらしいですね。正人からその話を聞いていました」
「この暑い時期から始めることもないと思うんだけどな。もう何人も倒れている」
初対面の時よりは滑らかに動くようになった口で、修治は話を受けてやる。やたらと大声を出すように言われたり、短距離を何本も走らされたりと真夏にするようなことではない。首筋に流れる汗はただただ不快で、上から降って来る灼熱の光に肌を焼かれる。砂地のグラウンドは照り

返しも激しくぱたぱたとよく人が倒れた。授業に出るのが面倒で、修治はそんな人間たちを保健室に連れていくことを請け負っていた。

「こんな季節だけどな、走っている間だけは涼しいんだ。空気も澱んだみたいに動かないんだが、走るとそれがからだにぶつかってきて、風みたいになって気分がいい。でも、足を止めればまた熱気に包まれる。それが煩わしくて、ずっと走っていたいくらいだった」

和寿は黙ってそれを聴いている。彼の記憶の中の風や、夏を思い返しているのだろうか。この木造の家では風通しが良すぎて、ひょっとしたら和寿は夏の凝ったような空気を知らないのかもしれない。高熱のもたらす冷や汗と、熱とは裏腹の悪寒。それが彼の体内に巣食うものだ。死のにおいすらしそうなそれらは生命の季節にはどうにもそぐわない。

話が少し切れたところで、背後に人の気配を感じた。振り返ると盆を抱えた使用人の女性がいる。正人が先に立ち上がって盆を受け取り、戻ってきた。グラスが三つと菓子の乗った皿が一枚。薄茶の水面に浮かんだ氷がなんとも涼しげだ。糖衣を纏った豆菓子の甘さはそれほどでもなく、柔らかく舌の上で溶けていった。正人はどうにもこれが好物のようでよく手を出していた。

江崎兄弟は剣道の話で盛り上がっている。正人の方は部活もしているらしくその中の練習試合の事を話題にしているようだ。修治は詳しくもないので黙ったまま聞いていた。和寿も体調を酷く崩すまでは竹刀を握っていたようで、今でも昔取った杵柄といわんばかりに、弟の素振りの様を見てやっているという。仲のいい兄弟だというのが修治の見立てだ。正人は素直な人柄で兄を心から慕っているようだし、和寿はくるくるとよく変わる弟の表情を見て目元を和ませている。

同胞のない修治には少しうらやましいような光景だった。
夕方、日の陰りだすころになると和寿の表情に疲れが見えてきた。これ以上疲れさせることもないだろうと修治は江崎邸を辞すことにした。そろそろ、と言うと和寿が立ち上がりかける。それを制して修治は立ち上がった。
冷えた板張りの廊下を一人歩いていく。追ってくる足音が聞こえたので振り返ると、正人だった。使用人が見送りに来ることがほとんどだが、今日は彼が玄関先に立つらしい。
「先輩」
踵を履きつぶしたスニーカーを履いてしまって引き戸に手をかけたところで、正人が口を開いた。戸にはめ込まれたガラスが夕日で赤く透けている。正人の日に灼けた頬も同じ色に染め上げられていた。
「兄さんは、あなたと知り合ってからずっと楽しそうです。家族以外の人と話ができるのが嬉しいみたいなんです。体調もしばらくよくって、この間は二人で近くを散歩できました。兄さんがよく笑うんです。生活に張りがあると言っていました。――兄を、どうかよろしくお願いします」
正人は深々と頭を下げる。ぴんと伸びた背がちょうどいい角度に曲げられている。なんということもないしぐさだが、彼の育ちの良さが分かった。言われなくとも、と修治は返事して戸を開いた。差し込んでくる日が目を射抜く。気を付けて、という正人の声を背に足を踏み出した。
帰途、暑さが引けたからか蝉がよく鳴いている。人の足を避けたようなところ。そこに転がっている腹を見せた早鳴きの蝉の死骸を目にして、夏は生命の季節だけでもないのだというのを思

い出していた。

※

『外国の方では、己の感情を日記やらに書きつけるとどこかで見たように覚えています。どうせ短いのだからと何も考えぬようにして人生を送っていましたが最近そういうわけにもいかなくなりました。感情をため込んでおいてはどうにもからだによくないので、こうやって吐き出しておきたいと思います。字も歪み文も酷く乱れるでしょうが、どうせ人に見せるものでもありません。

彼は私をカズと呼びます。姓で呼ぶこともしていましたが、彼の性にあわないと言ってやがて止しました。近しい友人がいたわけでもなし、そんな気安い呼び方なぞされたことがとんとありません。江崎の者ですらない自分というのを己の内に見つけたようで嬉しいのですが、未だ慣れずにどうにも照れてしまいます。

彼と出会ったのは晩春で、初夏でした。前日に比すれば暑かったように覚えています。長引いた風邪が小康となったので、微熱なのを強いて外へ出ました。歩けるところまで、行けるところまで足を伸ばそうと考えていました。道に倒れ伏して立てなくなればもうそれまでだと靴を履きました。無断の外出です。倦んでいたのでしょう。病のにおいの染みついた布団も、擦り切れた畳を見ているのも己の死体を眺めているように思えました。

風は涼しい日でした。けれど、駅までの大したこともない距離で息が切れました。目の前がチ

カチカと瞬きました。人ごみに飲まれるとそれらが一層増しました。上から降って来るひび割れた放送や地鳴りのような電車の轟音。突然放り込まれた知らぬ世界のようでした。足元がふわふわとおぼつかなくて、頭も酷く痛んで、いっそ消えて仕舞えたらと思いました。そこは受け入れられない場所でした。私の背にぶつかる者がありました。それが、彼でした。冷たくも通り過ぎる人々のなかで、彼だけが私に手を伸べました。彼は無口でした。けれど無骨な優しさを持っていました。それは今も同じで、彼はこの面倒な病人の元へ足を運んでくれるのです。

彼は、私の知らぬ世界を持っていました。私のために重たい口をこじ開けるようにして、その世界を私に分けてくれます。彼を介してならば、あの異界も私を受け入れてくれるのではと思わされます。彼の世界は私を拒みませんでした。決して上手い話ではないのです。それでも、名文家の小説より、ぼうと眺めるだけの映画より、真実をもって私に迫るのです。彼は時間も季節もばらばらの話をします。彼の思い出した端から彼の記憶の世界に入っていきます。この間は正人と一緒に体育祭の練習を話題にしました。正人は土埃に参っているのだといい、彼は走ることが気持ちがいいのだと言いました。私にとって風は向こうから吹いてくるものです。彼は自分からぶっつかっていくのだと。人工の空調もないのに気温のあまり変わらないこの家は、夏であろうと森閑とした空気が流れています。気分の悪くなる、からだに纏いつくような熱気と空気を感じたのは私の人生でほんの数度です。彼の言う、凝ったようなそれを、私はやはり知りませんでした。

近頃、蝉がよく鳴きます。引き戸を開け放しておいたら数匹飛び込んできました。彼はひょい

と捕まえるとそれを外へ放りやっていました。私と同じに早死にする彼らには不思議な近しさを覚えます。ただ、彼らほど全身震わせて、力強く、ただ希求して鳴くことが私には難しいのです。
体調を酷く崩すことも近頃はありません。十二分によいことですが、自儘を言えば、ほんの少しでいいから走りたい。』

※

盛夏、江崎を訪ねると戸を開けたのは知らない女だった。黒い髪をさっぱりと肩のあたりで切りそろえている。年のころは修治の倍ほどはありそうだが、明るい雰囲気を纏っているせいか若くも見える。カズに、と言いかけて和寿君と言い直した。女はぱっと顔を輝かせて修治を手招いた。
「今、あなたの話をしていたの。和寿の友達なんでしょ」
通されたのはいつもの部屋だ。聞き慣れない、子供のはしゃいだ声が耳に飛び込んでくる。目をやると声のままの幼い子供がいた。正人の膝に座り込んで、彼とその兄とに構われている。私の娘なの、と女は言い部屋へ入った。後ろをついて行くと和寿から挨拶された。
「彼女は綾子さんです。私と正人の叔母にあたります。この子はひなたちゃん」
綾子は正人の膝からひなたを預かると修治に座るようにと促す。突然現れた見知らぬ男に子供は人見知りをしているようで、修治としては気が引けたが彼女の隣へ腰を下ろした。皿に乗った

羊羹を差し出されたのでそれはありがたく受け取った。子供が惜しそうにそれを見送っている。気に入っていたものなのだろう。一口分切って目の前に出してやると両の目がきらきらと修治を見上げてきた。

「ひな、駄目よ。……この子自分の分食べちゃってるの」

「そんなに甘いものがすきなわけでもないので。欲しいなら」

小さな唇へ押し当ててやると、子供はひょいとそれを口へ含んだ。口のものがなくなったところで舌足らずな礼を言われたので、柔らかい質の髪を撫でてやった。綾子が少し呆れた顔で娘を見下ろしている。あっさりと気を許したらしいひなたは、母親の膝から抜け出して修治に関心を寄せてきている。幼子の扱い方など知らない。恐る恐るといった体で手を伸ばすと綾子が小さく笑った。

「そうおっかなびっくりしなくても。……この子男の人がすきみたいで。父親が居なくて寂しいのかもしれないんだけど」

修治の膝に乗り換えたひなたの背を支えてやりながら綾子はあっけらかんと言う。修治ははっとして彼女の顔を見るが、特になんの感情も読み取れない。伏せ気味の、薄化粧が施された目元はうっすらと悲しみのようなものを刷いてはいるがそれ以上はない。その表情に既視感に似たようなものを覚えるのは何故だろうか。

「――あら嫌だわ、そんなに深刻なことだなんて思わないで頂戴。天命とか、運命とか呼ばれるものだったのよ、きっと。不幸な事故だったの。そりゃあ悲しかったし今も寂しいわ。でも仕様

がないの」
　じゃないと生きていかれないもの。それは日常を切り取ったかのような言葉だった。綾子は娘の柔い頭を撫でる。目にかかりそうになった前髪を横へかいやってやり、修治へちょっと笑いかけた。
「いきなりこんな話になっちゃって悪いわね。私が気にしないようにってすると初対面の人にでも話してしまうの」
　修治は何も言えないで、ひなたへ目を戻した。母親のものと少し違うおもてが見上げてきている。
「外、行くか」
　慣れない手つきでひなたを抱き上げると歓声が聞こえた。首の後ろのところへ座らせて、肩車のかたちをとってやる。彼女の知らない高い視界が見えているのが面白いのだろう。今この部屋にいる中で一番背が高いのが修治だ。本来ならばこの世界を見せるのは父親なはずだ。
「カズ、正人、庭を案内してくれ」
　踏み石の上にそろえられた三足の外履きの一つをつっかけて庭へ下りる。ゆっくりと立ち上がった和寿は弟にほんの少し肩を支えられて外履きへ足を入れた。少し先を行っていた修治は歩みを止めてこちらを向いているようだが、その視線は和寿の肩を超えて綾子へと向いている。
「和寿」
　叔母に呼ばれて、和寿は肩越しに振り返った。弟には先に行くように言う。

「彼、修治君。……いいひとね」
和寿は曖昧に笑った。返事はやらずに、先に立った三人の元へと足を運ぶ。
修治は木にしがみついた蝉の抜け殻を見つめていた。ひなたが興味を示しているらしい。しきりに手を出して修治にいろいろと聞いている。口下手な彼に代わって正人が答えてやっているが、彼女はそれでもかまわないようだ。
強烈なほどに薄い肌を焼きにかかって来る日差しを避けながら木陰へ着くと、修治の目がちらりと和寿を向いた。
既視感の正体がつかめた。修治は二三度瞬く。空っぽになった蝉の抜け殻を、そしてその下にひっそりとうずくまっている亡骸を見ていて、思い出したのだ。
綾子のあの表情は死を見つめた者の諦念だった。彼女が天命だとかいう言葉で示し、飲み込んで、彼女自身を納得させたそれは和寿の見せる年よりも大人び過ぎた横顔と同じものだ。己はそのほの暗いような、後ろ向きな安堵感にどうしようもなく惹かれてしまう質らしい。生い立ちがそうさせるのかもわからない。他人と馴れ合うことが苦手で、それなのに受け入れられるところを探していた自身がすっぽりとはまり込んでしまったのが彼らの持つ諦念だった。
「……カズ、日陰にいろよ」
生きるべくして殻を抜け出した蝉、その抜け殻を枝から引き剥がす。これは希望の象徴だ。どれだけ土中にあろうとも蝉は己を失わずに空を目指して這い出して来る。枝にしがみつき、無防備なからだを外敵に晒しかけるようなこともして、この殻を脱ぎ捨てて空に飛ぼうともがく。

乾燥しきった抜け殻を、ひなたの汗でしっとりと湿った指に握らせてやる。足元にいた亡骸は外履きの底で押しつぶした。行き止まりの姿をこの幼子に見せる必要などない。彼女だけは、まだまっすぐに前を向いていていいはずだ。

空に近い蝉のからだは粉々に砕けた。やがては、土に帰すだろう。

※

酷暑がほんの少し落ち着いた頃、思い出したように和寿は床に伏せった。しばらく見なかった程に悪くなったが二、三日でなんとか持ち直した。両親と正人はつきっきりで和寿の枕元に居て、彼が座椅子に腰を落ち着けられるようになってようやく自分たちの仕事に目を向けた。随分と気を揉ませたようで、母などずっと泣いていた。今は綾子が出てきて彼らに代わって和寿を看ている。ひなたは幼稚園に預けてきたらしくここには居ない。彼女自身の仕事は都合をつけてきているようで、訊くと気にしないでいいと笑われた。

内臓に負担をかけぬようにと柔らかく煮られた粥が今日の昼食だった。あまり味のしないそれを、一人前の鍋半分だけ食べて和寿は座椅子にもたれていた。もともと寝込んだままでいるのは好まない。体力をすり減らすと言われても、からだが許せばこうやって座っていた。相伴していた綾子は先ほど来客があって席を立ったばかりだ。がらりと戸の開く音が聞こえて、客を玄関に入れたのだろうことがわかる。聞き耳を立てるのも礼を失するかと和寿は鳴蝉を聞いていた。

「修治君だったわ」
さっきまで手にしていなかった白いビニル袋を提げて、綾子は戻ってきた。修治さんが、とおうむ返しに呟き和寿は眉を下げる。綾子は反対に片眉を上げて駄目よと言った。
「もっと元気じゃないと。修治君も心配していたわよ」
和寿の不調は、いつの間にやら連絡先を交換していた正人から修治に伝わっていたらしい。どうせならば彼の声を聞くのだったと僅かばかり後悔を覚えた。
「桃をくれたの。食べる？」
綾子が袋を掲げる。昼は済ませたばかりだが、桃はなんとなく口に入れたい気分だった。一つ首肯すると彼女はそのまま台所へ向かった。
きれいな桃ばかりだった。はっきりした紅色にはところどころにぼんやりと白い斑点が浮いている。左右対称の双丘は手に触れるとほんのり冷たい。適度なくらいに冷めているようで、修治の細やかな気配りが見えた。桃は冷やしすぎてもよくない。すぐに食べられるようにとしてくれていたのだろう。丁寧に皮を剥き、櫛形に切った。ガラスの深皿に盛って、それに二本フォークを添える。果汁が皿の底にゆるゆると落ちていくのを伏し目に見ながら、綾子は和寿の部屋へ戻った。彼はこちらに背を向けて、座椅子に座り込んでいる。ほんの少しでも体力が回復すればすぐに起き上りたがるのだ。綾子の気配には気が付いているのだろうが、彼は振り返らないままでいた。
「——あなたがうらやましいんです」

差し出した皿から桃を一つつまんで、和寿はぽつりと言った。櫛形の半分ほどをかじって、そのまま削れた断面を見つめている。伏せた瞳は気だるげだがまだ光を失ってはいない。

「あなたと私は同じものを見ているはずなのに、彼があなたに見せる世界と私に見せてくれる世界が違う」

綾子は黙ったままでいる。余った方のフォークで桃を刺すと、果汁があふれ出してきた。甘ったるい香りが鼻孔をくすぐっていく。一思いに櫛形を口へ入れてしまって、綾子はその肉を噛んだ。少し温んだ表面と、未だ冷たい内面。おそらく、今の和寿の状態とは真逆のものなのだろう。

「彼があなたに見せている世界が、見たかった。……彼が私に見ているのは死の安堵だけです。彼はあなたの、死の向こう側にある生を見つめている。あなたは生きるから、ひなたちゃんがいるから」

そうね、と綾子は言った。他には何も言わなかった。その必要もないと思っていた。

「きっと、そうなんでしょう」

桃はよく熟れていて、甘かった。

※

『ひどいことを言いました。抑えが効かぬままに言いました。病人の戯言にもならぬほどのことです。綾子さんは笑ってこそいましたが心安からず思われているでしょう。あの人がどれだけな

きひとを想っているか知っているはずなのに、泣き伏すあの人を見ていたはずなのに。
夏の盛りにやってきた彼に、綾子さんを引き会わせました。ひなたちゃんも随分と彼に懐いたようでした。正人や私といる時よりもずっと楽しそうに笑っていました。背の高い、力の強い彼は格好の遊び相手になり得たのでしょう。
彼と、たびたびやってきた綾子さんは二人でよく話をしていました。私に語ってくれた彼のこれまでのことを、相変わらずの重い口で綾子さんにも聞かせていたようでした。綾子さんは彼女自身の思い出やら記憶やらからもいろいろと語って、彼の世界を引き開けてゆきました。私には決してできないことです。私の知らない世界を私の知らない顔で話す彼のその目を、私に向けて欲しいとどれだけか願いました。しかし彼はついぞこちらを見ませんでした。彼の瞳は前を向いていました。視線の先にあったのは彼の、この先ずっと続くはずの未来とか将来とか呼ばれるものでしょう。私が持つことが許されなかったそれを、綾子さんとひなたちゃんの向こうに彼は見ていました。
何故私に見せてくれぬのでしょうか。否、重ねて、できるはずもないのです。私の乏しい記憶と狭すぎる世界では彼の世界を開いてゆくことなどできないのです。馬鹿な私は筋違いな、強烈な嫉妬を覚えました。それと同じに、私自身に絶望を抱きました。なんと薄汚れた、卑しい、矮小な己を持つのだろうかと、ただただ恐怖しました。年少の頃から私を慈しんでくれた彼女にこんなに醜い感情をぶつけて、それを裏切りと他なんと呼ぶのでしょうか。私は答えを持ちません。どす黒いようなそれは、恐ろしいほどの速度で私を侵していきました。けれど、私はぎりぎりの

ところで彼女を憎み切れません。まだ、ぎりぎりのところで辛うじて踏みとどまることができています。

彼女が私やひなたちゃんに注ぐ情愛を嬉しく思っています。ひなたちゃんの無邪気さを愛しています。それが私を人へと引き戻すのです。ですが、あの畜生にも劣るような感情との摩擦が私に熱を生みます。世に葛藤と呼ばれるものでしょうか。近頃どうにも熱が引きません。今も薬で高熱を無理に押し下げてやっと起き上っている体たらくです。手の動くうちに、少しでもこの軋みを吐き出しておきたい一心でこうやって書きものをしています。もうじき私は駄目になるでしょう。けれど、浅ましくもこちら側にいたい心だけで生きています。彼がいつか私にあの世界を見せてくれるのではないかと、小指の先ほどもない期待だけで生きています。

そういえば、桃をいただきました。いつか彼に桃がすきなのだと言ったように覚えています。蜜のたっぷりと詰まった桃でした。

あの世とこの世との仕切りに、桃の木があると言います。その実もこれほどに甘ければいいのだと、そんなことを考えるのだけが今は私の救いとなっています。』

※

思えば、学校で正人と顔をあわせたのは初めてかもしれない。昼休みにすれ違った彼は随分と憔悴しきった表情をしていた。和寿の体調を聞いて江崎の方からはしばらく足を遠ざけていたの

もあり、こうやって会うのもいくらかぶりだ。
「……そんなに悪いのか」
わざわざ訊かずとも正人の顔を見ればわかる。目は腫れぼったいし、とにかく表情が暗い。そんな状態でよく学校まで出てきたものだと、むしろ手放しに褒めてやりたいくらいだ。おそらく、あの兄が行くように促したのだろう。
「――兄さんの顔、見に来てあげてください。先輩が来るのをずっと待っているんです」
正人はふいと視線を切った。少し曲がった背中がゆっくりと遠ざかっていく。溌剌として、まっすぐに伸びた背中が印象的な少年だった。それが、あそこまで打ちひしがれて頭を垂れようとしている。
まだ授業は残っているが、そう真面目な方でもない己がふらりと居なくなったところで問題にはならないだろう。勝手にそう決めつけて、修治は靴箱へ足を向けた。
南中を少し過ぎた位置にある太陽はもう翳りを見せ始めている。初秋と言ってもいいくらいの季節なのかもしれないが暦ではまだ早い。朝方など冷え込むこともある。もうじき学生服の上着を取り出すことにもなるはずだ。
戸を開けたのは使用人の女だった。あまりいい顔はしなかったが、和寿からの強い希望ということで修治を家へ上げてくれた。最後にこの家へ来たのは桃を差し入れた時だったか。
「ごめんなさい、こんなみっともない恰好で」
もう起き上ることもできないのか、臥したままの姿で和寿は修治を迎えた。やってきた声はい

やに細い。寝たきりになってそう短くもないのかほつれた髪が布団に垂れていた。
黙ったままに枕元へ腰を下ろすと、和寿はじっと見つめてきた。視線の元には落ち窪んだ目、少し下がると血の気の失せた頬。最後に顔を見た時は本当によかったのだと今更ながら思い知らされた。
「桃、美味しかったです」
かすれた声音が畳に吸い込まれていく。修治は何を言えばいいのかすらもわからないで、ただ一つ頷くにとどめた。和寿が息だけでふと笑う。修治の中の戸惑いに気が付いているのだろう。
「話しにくいならば、起き上りましょう」
病人の萎えきった腕が敷布の上をぞろりと這っていく。修治が慌てて押しとどめるが和寿は聞かない。思わずに肩を掴むと骨の感触がした。予想していたのよりずっと近い。脂肪はもとより筋肉すら落ちてしまっているのだろう。修治ははっきりと死のにおいを感じた。
「……悪かった。無理がさせたいわけじゃない」
和寿を掛布の中へ押し戻し修治は首を垂れた。和寿は変わらずに目を上げている。妙に透明な、諦めの混じった視線だけがあの初夏のままだった。
「秋は、何をされるんですか」
決して軽くはない沈黙を破ったのは和寿だった。初めてこの部屋へあがった時に口火を切ったのは確か己からだったように修治は覚えている。いくらでも黙っていられるはずの和寿が口を開いた。それだけ時間がないのか。

何が与えられるだろうかと修治は思う。冥土の土産などとそんな大仰なものでなくていい。先のある己のエゴかもしれない。確かに、和寿の諦念に惹かれていた。だがそれは諦念に包まれたままに死のうとしている彼を放っておく理由にはならない。ほんの少しでも、死のにおいが振り払われなければあまりに彼が憐れだ。

「……もう少ししたら、葡萄狩りができるようになる。あれは結構長く収穫時期があるんだけどな、俺は秋口の葡萄がすきだ」

房の一つ一つに白い紙の袋が掛けてあるのだと言うと和寿は興味深げに首を傾げる。何のためだかわからないとそのまま返すと小さく笑われた。

「その紙の下の端の方とかに切れ込みがあって、そこから袋の中を覗くんだ。それで、粒の大きくて黒いやつを鋏で蔓から切る」

「粒が大きくて黒いものですか」

話を聞いていて気分がいいのか和寿の目元に笑みが見える。何が面白いことがあるのか和寿は下手な話を聞いてずっと楽しそうにしているのだ。

「――よくなったら、行かないか。ここからそう遠くないところに果樹園がある。日ももう陰っているし、お前が体調をそう心配する必要もない」

あまりうまくない切り出し方なのは重々承知している。思えば、和寿と先の約束を交わそうとするのはこれが初めてだ。

和寿はしばしぼんやりと目を瞬いていた。やがて、じわりと焦点が修治へと絞られていく。開

きかけた唇が僅かに震えていた。
「私、ですか」
「ああ」
同じ世界が見られるのですかと彼は言った。ひどく嬉しそうな顔をしている。綻びた頬や唇は相変わらず色は悪いが、それでも喜色を隠せてない。
これでいいのだと、信じていたい。纏いつく諦念が、死が、ほんの少しだけでも遠ざけられればいい。

※

和寿は秋を待たずに逝った。穏やかな最期だったと、正人から聞くだけに留めた。
墓前に供える葡萄を狩りに行こうと、そんなことを考えていた。

※

『この記をどこぞへやるだけの余力ももうありませんが、どうにも書かねば身の内から私が燃え尽きそうなので筆を置くのを止しました。人に見せるものでもないというのは承知してはいてもなかなか酷い字になっています。少し見えづらくもなっているのです。

眠ることもできないほどに熱が続いています。もう薬もよくは効きません。入院でもすれば少しはましなのでしょうが、終の場所はここがいいのだと駄々を捏ねました。今は特別強い薬を頂いて、こうして隠れて書きものをしています。意識がぼんやりとしていますが、芯の方がしっかりとしているので大した問題でもないでしょう。

二十に届くか否かの人生を送ってきました。病に捧げた時間が多すぎて、私にはついぞわからぬままでいたことがたくさんありました。今更それを悔やむことはしません。それが天命だったのだろうから。両親や正人には悪く思いますが、きっと彼らも綾子さんのように受け入れられる時が来ると思っています。

ついこの間、修治さんから葡萄狩りの話を聞きました。彼が、私に彼の世界を見せてくれるのだと約束をしてくれました。ただ嬉しかった。あんなに焦がれた彼の世界が見られるのだと思うと、きっと叶わないことなのでしょうが、それでも嬉しかった。この喜びが、私のこの強すぎる感情が高熱をもたらすのならばいっそ本望です。

先に述べたように、愛だの恋だのわからないままの私でしたが、確かに焦がれていました。そうです、焦がれていたのです。彼の世界に、ただただ焦がれていました。後に誰かがこれを愛とか恋とか呼ぶのならばそれはそれで構いません。私にはとんと知れぬ感情でしたが、私がこのまま死ぬのならば、これは確かに焦がれ死になのでしょう。

自らの手で始末がつけられればいいのですがそれはもうできません。この記を見つけるのは正人あたりだと勝手に推量して、後を託したいと思います。

燃してください。私のこの想いが灰になるまで。私のこの想いはきっと皆の重荷になるでしょうから、お前には悪いと思うけれども、どうか頼みます。きっと燃してください。例えこの書付が燃え尽きようとそこにまだ私の想いが残っているはずです。ただ燃してください。塵芥と化しても、燃してください。すっかりなくなってしまって、それでようやく私の想いも灰となるはずでしょうから。』

（文学部文学科二年）

第七回東光原文学賞優秀賞受賞作品

御伽草子、橋姫の項。

かわひらこ

「幸や。方角はこの方角であって居(お)るのか？」

僧衣を身に纏った男の問い掛けに、少し先を歩いていた幸と呼ばれた女童(めのわらわ)は振り返り首肯した。

「お師匠。間違いありません」

幸の答に男は思わず苦笑が漏れる。お師匠と呼ばれる事には未だに慣れていない様子だった。

男は由緒ある貴族の家で産まれ育った。欲しいと思うものがあれば、容易く手に入ったし、生活に何不自由しなかった。しかし、そんな身分を男は嫌った。元来、貴賤と言うものに言い難い抵抗を覚えていた男にとっては貴族と言う身分は重すぎたのだ。そしていよいよ耐え切れなくなった男は仏門に入る事を決意した。

「これ、幸。そう急(せ)ぐでない」

「でも、お師匠。次の村まではまだ充分に距離がありますよ」

幸はあっけらかんと答える。まるで、次の村までの道程がはっきりと分かっているかのような口振りだった。

「なに。それなら尚更じゃないか。まだ幸はその身体に慣れていないだろう？」
「そんな、お師匠。幸は大丈夫です」
と、言った側から幸は足許の小石に蹴躓いて、たたらをふむ格好になる。そんな幸の様子に男は優しげな眼を向けた。一方の幸はと言うと、どこか罰が悪そうに眉間に皺を寄せていた。
これはある邦（くに）の話。まだ人と妖とが混在して、生活していた頃の話――。

村についた頃には日もすっかりと暮れていた。男と幸は先ず宿を探す事にした。
「妙に品位がある僧だが、あんた、高僧かい？」
宿屋の主人は男に訊いた。
「いやはや。私にはまだまだ徳が足りませぬ。謂わば、修行の身。この旅路は私にとって、勤行の様なものです」
男の答に納得したのか、宿屋の主人は今度は幸に目を留（と）めた。やはり、僧と童の組み合わせは物珍しいのだろう。しかし、主人はそれ以上、何かを問い質（ただ）すような事はなかった。
二人、部屋に腰を落ち着けると、早速男が口を開いた。
「して、幸。目的となる『者』は何処に居るのだ？」
幸は迷う素振りを見せずに男の右斜め後ろを指差した。
「その先。ここからそう離れてはいない場所。橋の上に『彼女』がいます」
「橋……橋、か」

男は一つ二つと打ち頷く。恐らく心当たりがあるのだろう。
「……今日はもう遅い。長い旅路で疲れただろう。その橋へは明日、向かうとしよう」
男の言葉を聞いて、幸は用意された蒲団の上に飛び込んだ。稚気のある仕種に、男も淡い笑みを溢すしかなかった。
小夜。幸は深い眠りに就いていた。男は幸を起こさぬように気を付けながら、部屋を後にした。
「おや、なんだい、こんな夜分に」
男が向かったのは、宿屋の主人の所だった。
「少し訊ねたい事があって、出来るのなら、今日の内に訊いて置きたいと思い訪ねたのだが……」
「訊きたい事？」
「ああ。……この村に橋があるだろう？ 多分、この方角だ」
幸が示した方角を示す。
「……ああ、あれか。確かに、あるな」
宿屋の主人は少し細い目をして答えた。
「あの橋について、何か知っている事があれば教えて欲しい。どんな些細な事でも構わない」
男の言葉に、宿屋の主人の表情が俄に怪訝なものへと変ずる。
「……変な事を訊く坊さんもいるもんだな。それともこれがあんたの言う勤行なのか？ まあ、どっちでも構わないか。あの橋には……名前がない」
「名前がない？」

男は主人の言葉を繰り返した。
「ああ。正鵠を射るなら誰も彼も忘れちまってるのさ。何せ、わざわざ好き好んで通ろうとする者が殆んどいないんだからな。使われなくなったら、忘れられる。そうだろう？」
男は続きを促すように、黙ったまま僅かに頷いた。
「あの橋にはいつ頃からかこんな噂が立っていたのさ。夫婦（めおと）、或いは男女の仲にある者同士が橋を渡ると、今までの事がまるで嘘であったかのように、うまくいかなくなると。最初の頃は、そんなものは与太話に過ぎないと、怖いもの見たさで渡る夫婦なんかもいたらしいが、やはりどの夫婦もうまくいかなくなったらしい。それが仲が良ければ良い程、不味くなるときたもんだ。流血沙汰さえも起こったと言われている」
「だからあの橋を使う者はいなくなった、と？」
「いいや。それが全く使われなくなった訳ではないんだ。例えば男やもめや女やもめが通ろうが害はない。要するに、夫婦や恋仲同士でなければあの橋は何の害も加えないのさ。それにここは見ての通り、何にもない処だ。客商売で何とか生計を立てている。当然、余所からの訪問者が知らずに通ることもある」
「……ふむ」
男は主人の話を聞いて、自分の考えが正しい事を悟った。
「夜分遅くに済まなかった。貴重な話を有難う」
「なに。良いって事よ」

主人は顔の横で手を軽く振った。男は部屋へと戻って、それから眠りに就いた。

翌朝。幸の案内に従い、件の橋へと向かった。人の通りは疎らで、それは橋の方へと近づくにつれ顕著になった。橋の側には誰の気配も感じられず、意識的に避けられている事が窺えた。

「この橋が……」

男は橋を見遣る。木材を組んで出来た橋は、少し年期を感じさせる渋い色味をしていた。傍らに立ち枯れた一本の梅と思しき樹が立っている。

男は橋に乗った。ギシと軋む音がやけに耳に響いた。

いつの間にか視界は霧がかっていた。全体どうしたことか、向こう岸が見えない。幸がぎゅっと男の手を握る。

男は橋の上を歩いた。永遠とも思えた向こう岸との距離は、しかし歩いてみるとなんてことはない、僅かな距離でしかなかった。

男は向こう岸にたどり着くと、一つ息を吐いた。今しがた来た道を振り返ると、一人の女性が欄干に、退屈そうにもたれ掛かっているのが見えた。しかし、それも一瞬の事だった。瞬きをした次の瞬間にはその女性はまるで最初から居なかったかのように、立ち消えていた。けれども、男にはそれだけでも十分だった。焦る事はない。男は自らにそう言い聞かせると、今度は別の方から宿屋へと帰っていった。

或る女の一生、壱。

或る処に二人の姉妹が居りました。妹は明け透けで、物怖じをしない性格をして居りました。姉はそんな性格の妹とは性格が異なって居りまして、内気で、何処か一歩引いたような、そんな性格をして居りました。

姉は妹の事を芯(しん)から愛して居りました。また妹も姉の事を芯から慕って居りました。ずっと一緒だよ。二人は時折、確認するようにそんな事を言い合っては互いの愛情の程を推し量(はか)って居りました。そんな生活が、時に些細な喧嘩はあれど、十数年続きました。

二人の生活の転機が訪れたのは、妹が十五歳になってから少したった、或る日の事でした。二人は行き倒れた一人の青年を発見しました。この日を境に、二人の関係が徐々に崩れてゆくことになろうとは、その時は誰も知る由がありませんでした。

「お師匠。朝ですよ」

幸に揺すられて、男は目を覚ました。寝起きの頭で、男は幸に紙と筆を持ってくるように言った。

幸がそれらの品を準備すると、男はそこにすらすらと文字を書いていった。幸は後ろからそれを覗き込むようにして見つめている。やがて、男は筆を置くと、そこには一つの物語の、序章とも呼べるものが出来ていた。

「お師匠。もう、『視(み)た』んですね」

幸の問い掛けに男は頷いた。
「しかし、これだけではまだ何が何だか分からぬ。今回はもう少し時間が掛かりそうだ。この魂は……」
そこまで言ったところで、部屋へと女が盆を持ってやってきた。朝餉の用意が出来たらしい。
男は出掛かった言葉を飲み込んで、朝餉を摂ることにした。
朝餉の後、幸は中断されていた話の続きをせがんだ。
「……あの魂はどうにも根が深そうだ。全てを把握するまでには時間が掛かるかも知れぬ」
幸は得心したのかしていないのか、曖昧な表情を浮かべて見せた。
「まあ、何はともあれ、行ってみるしかあるまい。どれだけ時間が掛かろうと、私は私の使命を果たすのみだ」
そう言うと、男は身支度を始めた。勿論、件の橋に向かう為に、だ。
男と幸とが橋に辿り着くと、やはり視界は薄靄に包まれたようになっていた。男と幸は橋を渡る。
丁度、橋の真ん中にまで差し掛かった頃、
「あなたたち、また来たのね」
声のした方に振り返ると、橋の欄干に腰をあずけて、値踏みするようにこちらを見ている女性がいた。髪はぬばたまの黒、着込んだ着物もまたどこまでも深い黒で、その上を目に痛いほどの黄色い薔薇（そうび）が模様として散りばめられている。見た目はあまり人間とは変わらない。しかし、明

らかに異質な存在だった。こちらを見る瞳は元来黒くあるはずの色を赤く咲かせ、それが人間とは異なった雰囲気を一層、引き出している。
「あなたたちはまさか恋仲にある訳ではないのよね？」
女性は訊ねる。
「私たちは親子だもん」
幸は答える。
赤眼の女性は視線で男に問い掛ける。男は静かに一つ頷いた。
「親子？　親子ねぇ……。良かったわね、あなたたち」
「夫婦ではなくて、と言うことか？」
女性の瞳の色が僅かに変化した。その瞳には猜疑心と好奇心、そんな感情が含まれていた。
「……そうね。あなた、何者なの？」
女性は訊ねた。
「ただの拙僧に過ぎない」
「そう。どうやら、あなたの目的は私のようね」
男は頷いた。
「でも、駄目よ。私は死なないわ。きっと、この橋が壊れても。別の橋に移り行くだけ。分かったら、さっさと引き返しなさいな」
女性は男と幸の結ばれた手を見た。その瞳には燃えるような憎しみが宿っていた。並大抵の人

間であれば、その瞳だけで射殺されるかも知れない。それだけ強い感情が込められた視線だった。
「……ふむ。今日はどうにも機嫌が悪そうだ。出直す事にしよう」
しかし、男は至って冷静であった。そう言い残すと、踵を返し、宿のある方へと去って行った。その後ろ姿を女はずっと睨み付けるような瞳で見つめていた。

「おっかなかったですね、お師匠」
「そうだな。……しかし、幸よ。家族とは全体どういうつもりだったのだ？」
「お師匠は幸を『人間』にしてくれました。だから、お師匠は幸にとって父親でもあり母親でもあるのです」
幸は屈託なく言った。一方で男は何とも形容し難い表情をしていた。

或る女の一生、弍。
姉妹は青年を介抱しました。意識を取り戻した青年に、姉妹は質問を重ねました。どうして行き倒れていたのか、どこから来たのか等々（とうとう）。青年はそれらの質問に一切、嫌な顔を見せず、真摯に答えました。
青年は流浪者でした。此処よりもずっと遠い何処かから放浪して来たのだと言いました。どうしてその様な事をしているのかと妹が問えば、男は申し訳なさそうな顔をして、金貸しから逃げて来たのだと答えました。首が回らなくてと。その時の青年の声は何処か悲痛な響きを打って居

りました。
そんな青年を見て、姉妹は相談をしました。そして、一つの決断を下しました。それは、青年を家族として招き入れ、一つ屋根の下で、共に暮らそうと言うものでした。姉妹は二人きりの家族でした。両親は早いうちに流行り病で亡くして居りました。
青年はその申し出に驚嘆したような表情を浮かべましたが、断る理由も別段、見当たらなかったので、その申し出を受けました。
こうして三人の共同生活が始まりました。

男は視たままの情景を文字に起こす。その様子を幸が隣で眺めている。
「お姉さんか妹さんがいたんですね」
文章を見ながら幸は言った。
「どうやら、その様だな。そして、新しく登場したこの男……」
「お師匠にはもう大体の検討はついているのですか？」
男は少し思案する素振りを見せてからゆっくりと口を開いた。
「……確信している事が一つ。しかし、他の事は結論を出すには如何せん、早計過ぎる気がするのだ。幾ら推し測(はか)ってみたところで、それは空想の域を出ない」
「確信している事とは？」
幸が問う。

「あの女は……『橋姫(はしひめ)』だ。本人が言って居っただろう？ 橋を壊したところで、また別の橋に移り行くだけだと。これはつまり、橋に関係のある妖と言う事だ。そして、夫婦の仲を引き裂く、それは正しくこれ迄、語り継がれてきた橋姫の特徴なのだ。妬心の塊のような存在としてな」
「妬心の塊……」
「幸にはまだまだ難しいかも知れぬな」
そう言って、男は笑いながら幸の頭を優しくぽんぽんと叩く。
「な、何を仰いますか！ そう言うのは男の子(お)よりも女の子(こ)の方がよっぽど詳しいのですよ」
「……ふむ。確かに、橋姫……。姫、と付く位なのだから、幸の言う事も一理あるかも知れぬな」
「そうですよ」
「しかし、何れにせよ、幸はまだ幾分、幼過ぎるな」
「むう。お師匠は意地悪です」
「……さて」
そう言うと男は先日のように身支度を始める。
「今日も行くのですか？」
「無論だ。何だったら、幸は宿で休んでおくといい」
男は言った。
「そんなまさか。私はお師匠に付いていきますよ」
幸も身支度を始める。

「……あんた達、あの橋に行ってるんだって？」
丁度、宿を出ようという時に話掛けられ、振り返ると、宿屋の主人がまるで珍しいものでも見るかのような視線を二人に向けていた。
「……子どもがいるって事は、あんたにも伴侶がいる訳だろう？ わざわざ危険な橋を渡ることはあるまい。止めときな。あの橋は本物だよ」
「……心遣いはありがたいが、生憎、私に伴侶は居らぬ」
そう言うと、宿屋の主人の瞳に疑惑の色が浮かぶ。
「……幸は、頼まれたから預かっているだけだ。それ以上、深い理由はない」
「尼削ぎでもして、立派な尼にでも育ててくれって、その子の親御に頼まれでもしたのか」
「まあ、そんなところだ。……話がそれだけであれば、私は例によって件の橋に向かわなければならぬので、失礼させて頂くが……」
「……もしもあんたに僧として不思議な力があるのなら、是非ともあの橋に住む化け物を退治して欲しいもんだがね。悪い噂ってのはどうにも村に悪い影響を与えちまうもんだからな。その村が狭ければ狭い程、とくにな」
「それは……保証は出来ないが、善処しよう。魂をより良き方向へと導く為に」
男はそう言うと宿を出た。
少し歩いたところで、男の手を幸が握り、身を寄せてくる。

「お師匠。お師匠は、幸の事をそんな風に思っているのですか？」
幸は先ほどのやり取りの事を言っているらしい。
「……大人の世界には、様々な事情が柵（しがらみ）となって在（あ）るのだ。幸も直に分かる時が来るだろう」
「……幸はもう、大人です」
「……確かに、長く生きて居るかも知れぬが、まだまだ見た目はそこらの女の子と変わらぬ。それに、幸は幸として産まれ変わったのだから、それ以前の事は切り離して考えねばならぬ。私の言って居ることの意味が分かるな？ 幸よ」
「それは……分かっています。幸は幸です。他の何者でもありません」
幸は頭を振った。
「そう、幸は幸なのだ」
男は念を押すように言った。
幸は一つ小さく頷いた。
さて。この男には少し変わった力が備わっていた。『視よう』と思う事で、魂の記憶を『視る』事が出来るのだ。視ようと思った魂の記憶を、夢の中で視る事が出来た。
しかし、視る為にはその者に接触しなければならない。また、一度に視る事の出来る記憶の量には限りがあった。だから、幾度か接触を重ねる事で初めて、一つの繋がった記憶として視る事が出来ると言う訳だ。
わざわざ女の許に足繁く出向いているのは、つまり、彼女の魂の記憶を視る為であった。

……そもそも妖と言うものは人間が産み出したものである。人間が居なければ、妖は産まれなかった。妖とは人間の都合に合わせて産まれた存在だった。

人間は妖を畏れるが、その妖を産み出しているのが自分たちであることに気づいている人間は少ない。男はその数少ない人間のうちの一人だった。

橋に辿り着く。今度も薄靄に包まれている。薄靄に浮かび上がる一つの影。橋姫だ。彼女はこちらに背を向けて橋の中央付近で立っていた。

「……しつこいわね、あなたたちも。よっぽど呪われたいのね」

「まあ、待て。勘違いをするでない。別に私はお主を退治するつもりなんて更々ないのだ」

橋姫は振り返る。赤眼が男を射抜く。

「じゃあ、あなたは何をしにわざわざこの橋まで足を運んでくるの？」

「それは……」

男は少し迷う素振りを見せた。

「……私にも分からぬが、放ってはおけないのだ。特に、歪んでしまった魂をより良い方向に導ければと、そう思ってこうして旅をして居るのだ」

男の言葉を聞いて、橋姫は笑った。

「歪んでしまった魂？……ふふ。笑わせてくれるわ。私は橋姫。夫婦や恋仲にある男女の仲を引き裂く為に橋で待っている」

「そうか……」

男は橋姫の話を聞いて、少し哀しげな表情を見せた。そんな男の様子に橋姫は眉間に皺を寄せて、不機嫌そうな表情を見せる。
「……妬心は誰しもが抱えている感情。もしも仮に、妬みが感情の歪みであると言うのなら、人間の在り方も歪んでいると言う事よ。分かって？」
「……ああ、確かにな。人間という生き物は醜く、そして、歪んでいる」
男は貴族時代の頃を思い出しているようだった。貴族たちは、より良い身分を確保する為に人を貶める策を弄したりした。そんな事は取り立てて珍しい事ではなかった。人を貶めて、自らの地位を高めてゆく。男にはそんな日常がとても耐え切れなかった。人の価値は地位によって定められるものなのだろうか。否。そんな事はないはずだ。そんな価値観は……捻じ曲がっている。身分を、自由を与えられながら、そんな考えを抱いていた男は、きっと貴族の憂鬱に発露した、傲慢で烏滸がましいものに映るだろう。
男もその事は重々に承知していた。しかし、男は貴族としての身分を捨てた。一生を約束されたものを自ら捨ててしまったのだ。
それに、己に宿った不思議な力の使い道を模索していた。きっと、この力は何かしらを為すために自らに与えられたものなのだ。そう思うと不思議と己の中で合点がいった。
「人間のくせに……人間を愚弄するような事を言って……あなた、おかしいんじゃないの？」
「確かにな」
「卑下も過ぎれば愚者にも劣るわよ。……あなた、本当は何が目的なの？ さっき言ったわよね。

魂をより良い方向に導くために旅を続けているって。なら、あなたは私をより良い方向へと導くと言うの？」
「……ああ」
男の言葉を受けて橋姫は笑った。
「私は橋姫よ。それ以外の何者でもない」
「……橋姫、か」
男は確認するように繰り返した。
「そうよ。夫婦や恋仲にある男女の仲を引き裂くの」
「それは……それが本当に橋姫なのか？」
男の問い掛けに橋姫は呆気に取られた表情になる。
「……何が言いたいの？」
「いや、私はただ確認をしただけだ。夫婦や恋仲にある男女の仲を引き裂くのが、本当に橋姫なのかと。お主はそれで満足なのかとな」
「……ますます訳が分からないわ。でも、ひどく不愉快。もう、私の前に姿を現さないで。早く帰ってくれる？」
「そうだな。今日は……帰るとしよう」
そう言い残すと、男と幸はその場を後にした。

或る女の一生、参。

苦労するかと思われた三人の共同生活は思いの外にうまく行って居りました。

妹は兄が出来たようだとはしゃいで居りました。姉の方も似たような心持でした。家族が増えた事に対して素直に喜んで居りました。

しかし、幸せな生活はそう長くは続きませんでした。

妹は持ち前の性格から青年に甘えました。そこには下心など一切ありませんでした。一方の姉はと言うと、そんな二人を見ていると胸の中がざわつくような、言い様のない不快感をいつ頃からか、抱くようになって居りました。誰も分からないうちに三人の生活は破滅の道を辿って居りました。そして遂に、現実に形となって現れてしまいました。

今朝から降り出した雨はその雨脚を弱めることなく、降り続けている。

男は例の如く、記憶を綴り、幸はそれを見て思ったことを口にする。

「流石にこの雨ではな……。仕方ない。今日は大人しくしておこう」

男は止む気配のない雨を見ながら呟く。

「……そうだ、お師匠。見て下さいっ」

そう言いながら幸が巾着から取り出したのは二つのお手玉だった。

「では、いきますよ。それっ」

そう言って幸はお手玉を始めた。ぽんぽんと調子良く最初は捌(さば)けていたが、やがて捌ききれな

くなり、お手玉は幸の手からこぼれ落ちた。
「随分と上達したものだな」
そんな幸を見て、男は感心して言った。
「まだまだ。これからが本番ですよ」
そう言って幸は三つ目のお手玉を取り出した。
「む……幸よ。いくら何でもそれは……」
男の心配とは裏腹に、幸は自信満々な様子だった。
「大丈夫ですよ。いきますよ。それっ」
幸は不恰好ではあったが、三つのお手玉を回していた。しかし、如何せん、腕が足りなかった。三回、回したところで、一つのお手玉が幸の頭の上に綺麗に乗っかった。何とも間抜けなその絵面に、男は笑いが堪えきれない様子だった。
「お師匠。……笑わないで下さい」
「……分かった、分かった。だが、幸よ。本当に、随分と上達したものだ」
男は沁々と言った。
「日々の研鑽のたまものです」
幸は誇らしげに胸を張った。
「ほう……研鑽とは。また難しい言葉を知って居るものだな」
「お師匠が時々言っているのを聞いているうちに覚えたんですよ」

幸はにっこりと笑う。
「言葉は大切なもので、とても影響力のある扱い難いものだ。お師匠がそう言っていたので、私も言葉は大切にしているのです」
「うむ。見上げた、良い心掛けだ。言葉には不思議な力がある。それを知らずに生きている人間の実(げ)に多い事よ」
男は頭を振った。
「……幸は幸で、在れる事を幸せに思います」
幸は本当に幸せそうに笑う。
男は静かに口を開いた。
「……言霊と言う言葉がある。言葉にはそれだけの秘められた力があるのだ。幸よ。私はお主に名を授けた。その時からお主はただの座敷わらしから人間へと産まれ変わる事が出来た」
「はい」
「そして、一つの妖には幾つかの側面がある場合もある。それらの違いも結局は器に吹き込まれた言葉や、その意味の違いによるものだ」
「はい」
男はそれから暫くの沈黙を置いて、おもむろに口を開いた。
「……幸よ。私には未だもって分からぬ。お主に名前を授け、生を与えた事が本当に正しかったのか」

幸は男の言葉を聞いて、やをら口を開いた。

「……お師匠。さっきも言ったと思いますが、幸は幸で在れる事を本当に幸せに思っています。幸は分かりませんでした。どうして自分自身が妖であるのか。何か大切なものがあったような気もするのです。何かとても大切な……」

男は黙って幸の言葉に耳を傾けていた。

「でも、あの頃の私にはそれが何であるのか思い出す事が出来ませんでした。今でも、思い出す事は出来ません。……けれど、山中に豪奢な家がありました。それだけは辛うじて覚えています。門を潜ると、直ぐ右手に庭園が広がっていて、そこには紅白の花が咲いていました。手入れの行き届いた家屋の中はしかし、人気が全く感じられませんでした。まるで忘れられたように寂しげで、けれどもとても美しい建物があったのです。それ以前の事も、それ以後の事も覚えてはいないのです。どうしてそこに向かったのかも、それからどうなったのかも。ただ、やらなければいけない何かがあった事だけは忘れてはいませんでした。でも、その何かが何なのか分からないので、結局、どうしようもなかったのですが。……気付いたら茶碗を持って、道端に座り込んでいました」

幸の言葉を聞きながら、男は思い返していた。幸と連れ立って訪れた村の事を。その村には少々変わった風習があった。

男と幸はその村で一軒の破屋を見つけた。中を覗いて見ると、家中が蜘蛛の巣に覆われていて、その様子から住人がいなくなって久しい事が窺えた。男は幸が持っていた茶碗を囲炉裏の側に置

くと、手を合わせ黙祷を捧げ、それから破屋を後にしたのだった。
「……後悔はありません。あの日、幸の前にお師匠が現れなければ、きっと幸はもっとおぞましい『何か』に変わっていたと思うのです。だから、お師匠には感謝しています」
幸はそう言ってにっこりと笑った。
「……そうか」
「そうですよ。だから、そんなに不安そうな顔をするのは止めて下さい」
「……うむ。そうだな」
そう言うと、男は幸の頭を撫でた。幸は気持ち良さそうに目を細めた。

幕間。
或る女童の一生。
或る村に一人の女童が居りました。女童は両親の一人子(ひとりご)の娘で、たいそう可愛がられて育てられました。ただ、一つ問題があったとしたならば、その女童は声が発せない、唖者(あしゃ)だったということでした。しかし、両親にとってはそんな事は何の問題にもならない些事に過ぎなかったのですが、これが後に大きな問題になるとは、露とも思い至りませんでした。
その村には或る風習がありました。それは十年に一度、女童を龍神様への供物として捧げると言うものでした。そして、その年が前の儀式から丁度、十年目の年に当たって居りました。
村の人達は両親に詰め寄りました。不具者であるその女童を供物へと差し出すのだと。それが

村の為であり、延(ひ)いてはその子の為になるのだと。
女童には大人たちが何を言っているのかよく分かりませんでした。ただ、辛く苦しんでいる両親の姿は見たくありませんでした。慰めの言葉を掛けたくても、言葉は声となってはくれませんでした。
そして、遂にその日が訪れました。両親は泣いて居りました。女童はそんな両親の頭を優しく撫でました。まるで大人が子どもをあやすかのように、優しい手つきで。
女童は一人、山へと向かいました。龍神様を奉っている祠を目指して。豪奢な真紅の着物を身に付けて。独り、山の中へと向かったとさ……。
これは或る女童のお話。後に座敷わらしとなったある女童のお話……。

翌日。前日の雨が嘘のように、空は澄み渡り、どこまでも青空が続いていた。
男は手を翳し、空を仰ぎ見る。雲一つない快晴の空。今日はどうやら、橋に向かう事が出来そうだ。
男が起きてから暫くすると、幸も目を覚ました。
「今日の眠りは随分と深かったようだな」
幸は眠気眼を頻りに擦っている。
「……はい。まだ、何だか夢見心地です。少し、顔を洗ってきますね」
そう言うと、幸は部屋を後にした。

男は幸が帰ってくるまでの間、窓辺から見える景色をぼんやりと眺めていた。
暫くすると、幸が戻ってきた。きちんと覚醒したらしく、その証拠に目がぱっちりと開いていて、その内側からは若々しい活力が感じられる。
「さあ、お師匠、向かいましょう」
「うむ」
男は頷くと、宿を発った。
橋姫は相変わらず独り、橋の上に佇んでいた。
「……あなたたち、本当に懲りないのね。あれほど忠告したにも関わらず……」
橋姫は呆れたように頭を振った。
「……今でこそ夫婦や恋仲にある男女の仲を引き裂いているのだけれど、それは嫉妬心が高じて行っているだけの事。別に呪うのは男女の仲じゃなくても良いのよ。例えば、そう、あなたとその女童の関係をおかしくさせる事だって、出来るのよ」
橋姫は何でもないように言ってのけた。
「幸はそんな心を持ち合わせていません」
橋姫の言葉に幸が反応する。
「甘いわね。妬心は誰しもが抱えている感情よ」
橋姫は不気味にくつくつと喉を鳴らして笑う。やはり目の前の女性は人に在らざる者であると、男は再認識する。

「私には見える、見えるのよ。人が抱えている妬心が。勿論、あなた達のもね」
「……橋姫よ」
それまで橋姫の言葉を黙って聞いていた男が、おもむろに口を開く。
「何よ？」
「お主はいつからこの橋に留まって居るのだ？」
男の問い掛けに橋姫は少し考えるような素振りを見せる。
「……そんなの覚えていないわよ。気付いたらここにいたのだから」
橋姫は憂いを湛えた表情になる。
「そうか」
男は橋姫の答に頷いた。そんな男の様子を見て、橋姫は苦笑をもらした。
「あなたたち……本当に変わってるわね」
橋姫の肩の力が抜けたように、男には感じられた。
「そうかも知れぬな」
男はここぞとばかりに、呵々大笑した。
「……もう馬鹿馬鹿しくて、呪う気にもなれないわ。……好きになさいな」
「良いのか？」
「……ええ」
橋姫は諦めたように頷いた。

男は少し考えてから口を開いた。
「……橋姫よ。お主は真に過去の事を覚えては居らぬのか？」
「……どういう意味よ？」
「思ったままを訊いたまでよ。……橋姫よ。妖はどうして産まれると考える？」
「そんなの……分からないわよ。何よ、禅問答でも始めようって言うの？　勘弁して欲しいわね」
男は幸の頭に手を乗っけた。
「……この幸は元は妖であった。私が名前を授けた事で、人間に成ったのだ」
橋姫は黙っている。
「幸はとある地方で座敷わらしとして道端に座り込んで居ったのだ。大切そうに一つの茶碗を抱えてな」
「茶碗？」
唐突に出てきた、脈絡のない言葉を何とか解釈しようと橋姫は試みたが、駄目だった。彼女は内容の仔細を促すような視線を男に寄越した。
「……うむ。聞いたことはないか？　マヨヒガに関する噺を」
「マヨヒガ……？」
「うむ。マヨヒガの物品を持ち帰ったら幸せになれると言う噺（はなし）がある。……山の向こうの龍神様の祠と言うのは、恐らくはマヨヒガの事を指していたのだろう」
「……話がよく見えないわね」

幸の過去を知らぬ橋姫に分かるはずはない。しかし、男は敢えて、彼女にこの話を持ち出したのだった。

「……何。気にするな。ただ、私がお主に話しておきたかっただけだからな。では、今日はここらでお暇させてもらうとしよう。お主の気が変わらないうちにな。幸。行くぞ」

「はい」

男は橋姫に背を向けて歩き始めた。

或る女の一生、肆。

それは或る晴れた日の事でした。畑仕事に行った妹と青年が帰ってこないことを訝った姉が様子を見に行くと、道の外れで妹と青年が接吻をしている処を目撃してしまいました。

その時、姉は自分の感情に気づいてしまいました。これは妬心(としん)だと。姉はいつしか青年に恋情を抱いていたのでした。しかし、青年は姉の自分ではなく妹の方を選んだのだ。そう思うと、姉は妹の存在が疎ましく、否、憎くさえ感じられたのです。妹がいなければ……。そういう考えに思い至るのも時間の問題でした。そして、あの日。嫉妬に狂った姉はとうとう取り返しのつかない行動に出てしまいました。姉は妹を手にかけてしまったのです。

これは、或る女の一生のお話。やがて橋姫となった或る女の一生のお話……。

男は目を覚ました。今しがた視た、夢を文字にして綴る。

「……そうか。そういう事だったのか」
外はまだ暗闇に包まれている。夜明けまではまだ時間がありそうだった。
幸はまだ眠りに就いているらしく、すやすやと規則正しい寝息を立てている。
男は幸を起こさぬように気をつけて、宿を後にした。
橋に辿り着くと、やはり、彼女は物憂げに佇んでいた。
「……また、来たのね」
「ああ。……何れにせよ、これで最後にするつもりだ」
「……そう。清々するわね。しつこい人間に付きまとわれなくて済むのだから」
橋姫は疲れたように笑う。
「橋姫よ」
「何かしら？」
「……」
男は暫く考える素振りを見せた後、口を開いた。
「……お主は、やはり純真だったのだな」
男の言葉に橋姫は面食らった様子を見せた。
「……何を言っているのよ」
「言葉と言うものはその魂が無垢であればあるほど、影響を与えやすい。いい換(か)えるのならば、魂が言葉に上書きされやすいのだ。……お主は姉の事を愛していたのだな」

「な、何を言って……」
橋姫は明らかに狼狽えていた。
「……済まぬな。これ迄、言わなかったが私には魂の過去が視えるのだ。悪いとは思いつつも、お主の過去を視させてもらった。その為に、私はお主に幾度も会いに来ていたのだ」
「……そう、だったのね」
橋姫は呟いた。
「私は初めてお主の魂の記憶を視た時からある疑念を抱いていた。大体は、核となる魂の記憶が映し出されるのだが、お主の魂の記憶にはまるで姉妹、双方の記憶が複雑に入り交じっていたからだ。だから、私にはお主が姉であるのか、妹であるのかが分からなかった。しかし、次第に記憶は姉の妬心を映し出すようになった。……魂は清らかであればあるほど上書きされやすい。白紙に文字が綴りやすいのと同様に。先ほどは言葉と言ったが、これは何も言葉だけに限らない。目に見えない想いというものも、言葉と同じように、魂に影響を及ぼし得る。……お主は姉の妬心から生まれたのだな」
男の言葉に橋姫は思案するような素振りを見せた。
「そう、ね。貴方の言う通りよ。もう旧い記憶だから、随分と手垢にまみれてしまったけれど。……私は姉さんに殺されて、ようやく姉さんの想いに気づくことが出来たの。姉さんの記憶や想いが身体……いいえ、もっと原始的な……貴方の言葉を借りるなら、魂とでも呼べば良いのかしら、そんなものに流れ込んできて……初めて知ったのよ。姉さんがどれだけ私の事を憎んでいたのかっ

てね」
　そこまで言って、橋姫は苦笑した。
「……でも、姉さんってば、徹する事が出来なかったのよね。私を殺してしまった事をずっと後悔していたわ」
「……血を分けた人間をどうして芯から憎しみきる事が出来るだろうか」
「……ええ、そうね。こんな風になってしまったけれど、私は未だに姉さんの事を好いているもの。だって、たった一人、血の繋がった家族だったのだから。もう、その顔立ちすら定かではないのだけれど……。私の過去を視たのなら分かるでしょう？　あれは事故のようなものだったの。私にそんなつもりは全く無かったのよ。本当よ？」
　橋姫は頭を振った。
「私は三人でいられたら良かったの。でもあの人はそれだけじゃ物足りなかったらしくて……。たった一度、接吻をする事で、これまで通りの生活を続けていく事を約束したわ。けれど、人生っていうものは中々うまく行かないものね。まさかよりにもよって、その現場を目撃されてしまうなんて」
　橋姫は苦笑を漏らした。
「……そうだな。だが、お主は誇るべきだ。お主の魂は清らかであった、その事実は例えどんな事があっても、覆る事はない」
「そんなの……無理よ。私が橋姫となって行ってきた事を思い返すと、とてもではないけれど、

誇ることなんか出来ないわ」
「そうか……。しかし、橋姫よ。お主は少しだけ勘違いをしている」
「……何よ」
「橋姫には宇治の橋姫のように、嫉妬心の塊としての側面も持ち合わせているが……、それとは別に、愛(いと)しき姫、『愛(は)し姫』としての側面も持ち合わせているのだ。それは全てを愛し、赦す神様だ」
「愛し姫……？」
「そうだ。言葉には不思議な力があると言ったな。同じ言葉であっても、解釈の仕方は幾つもあるのだ。その言葉に宿る想いの分だけな。ただ、その事に気が付いていないだけで」
男の言葉に女性はまるで今、初めて何かに気がついたように、目をしばたたかせた。
「……そう、なのね」
「……ああ」
女性は何かを考え込むようにして一旦、沈黙を置いた。それからおもむろに、
「……魂をより良い方向に導くとあなたは言ったわね」
女性は訊ねる。
「……ああ」
「……そう。私は……」
女性は空を仰ぎ見た。

東の空が白み始め、直に夜明けが訪れるのだろう。女性は東の空を眩しそうに眺めながら、小さな溜息をこぼした。
「……一つ、訊いても良いかしら？」
「何だ？」
「先日、貴方が私に問うた事よ。どうして、妖は産まれるの？」
「……全ての妖の魂は、人の生に通ずる。人の魂を核にして、言葉や想い、そんなものに肉付けされていって初めて、妖は産まれるのだ」
「人間は死ぬと、妖に産まれ変わる、そう言う事？」
男は頭を振る。
「それは少し違う。全ての妖の魂は人の生に通ずるが、全ての人の魂が妖の生に通ずる訳ではない。……お七夜と、初七日と言う言葉があるだろう？」
「……ええ。その言葉なら多少、知っているわ。お七夜は七日目の夜を迎える事の出来た赤子に名前を授くる事で、人間として俗世に受け入れられるようにする習わしの事。初七日は死んだ人間の魂は七日間掛けて三途の川へとたどり着き、そして初めての審判を受ける事になるという考え方の事。そうよね？」
「ああ。お七夜は、『名前』を授くる事で、産土神から人間として存在する事を赦される大切な儀礼だ。生誕後、まだ名前を持たない赤子は神の子であって、決して人間ではない。この儀礼を通して、人間は本当の意味で産まれるのだ。一方で、初七日を過ぎて尚、うまく死にきれずに、

彼岸へと往くことが出来なかった魂が転じて、妖になるのだ。簡単に述べるのならば、お七夜が人間として産まれる為の期間であるならば、初七日が妖として産まれる為の期間であるという事だ」

「……そう」

女性は得心したように頷いた。そんな女性に男は訊ねる。

「……お主はこれからどうするつもりなのだ？」

「どうする、と、言うと？」

「例えば……幸のように新たな存在を確立させるか。それとも或いは……」

男の言葉に女性は笑って見せた。今までに見せたものとは違う、どこか爽やかな笑みだった。

「……止めておくわ。確かに、人間としてもう一度、生を受ける事も魅力的な事かも知れないけれど、もう、姉さんはいないのよ。哀しい事はあったけれど、私が姉と生きた日々は失われない。人間の頃の私はもう、充分なだけの幸せを享受したわ。だから、今度は……橋姫としてではなく、貴方の言った、『愛し姫』として、この橋と共に『生きていく』事にするわ。今までの罪滅ぼしも兼ねて、ね」

愛し姫はそう言うと、男を見た。未だに赤くはあったが、澄んだ、綺麗な瞳だった。

「……そうか。お主がそう決断したのなら、これ以上、私から言うことは何もあるまい。……私はもう行くとしよう」

「ええ。もう二度と会うことはないでしょうね」

「ああ」
「……さようなら」
男は愛し姫の言葉を背に歩き始めた。
空はもうすっかりと白んでいて、夜明けが訪れた事を知らせた。そして、一つの魂が妬心の呪縛から解放された事を静かに伝えたのだった。

――数十年、或いは数百年後の話。
ある村に一つの橋が架かっていた。春を迎えると梅の花が咲き、可憐なその様子に、思わず足を止めて見いってしまう者が後を絶たなかった。
又、その橋には一つの噂話が秘(ひそ)やかに囁かれていた。それは人と人の縁を結ぶ、縁結びの神様がその橋にはおわしていると言うものだった。名前がなかったその橋はいつしか七夕の伝説になぞらえて、鵲(かささぎ)ノ橋と呼ばれるようになったという話だ。
満開の梅の樹の下に、今、一人の女性が立っていた。女性は梅の樹を見上げながら、小さく笑った。過去、嫉妬に狂った一つの魂は、今は皆を愛し、赦す、愛し姫として橋を見守り続けている。
これはある邦の話。まだ人と妖とが混在して、生活していた頃の話――。

（薬学部薬学科六年）

第七回東光原文学賞優秀賞受賞作品

我が親愛なるあなたへ

伽　音

少々長くなりますが、思い出話をさせていただきます。

僕たちが初めて出会ったのは十年前のことですね。あなたは僕の姿を認めるなり、その目を輝かせて僕に飛びついてきたものでした。大人の事情もよくわからない僕は、まだまだクソ生意気な中学生だったので、「何してんだ離せクソが」と初対面のくせに暴言を吐いてあなたをひっぺがそうとしました。ぎゅうぎゅう抱きしめてくるあなたはそれをものともせずに、心底嬉しそうな表情を僕に向けていたのを覚えています。中学生なのだから当たり前といえばそれまでですが、僕はあなたよりも随分と背も低くてすっぽりと包みこまれてしまっていたので、なけなしのプライドはそれはもうズタズタになったものです。それに加えてなんだかやわらかくてあたたかくていい匂いがするものだから、思春期ど真ん中の僕は正直気が動転していました。かわいいかわいいと言われるのも正直屈辱でした。恥ずかしいようなくすぐったいような、でもそれを認めたくない男子中学生は、最後にはあなたを思わず突き飛ばしましたね。よろけて尻餅をついてしまったあなたが困ったようにまた笑うから、僕の気持ちはどこに向かったらいいのか分からずに、そ

のまま僕の右頬にずんと重い衝撃となってやってきました。なぜだかよく分からないけれど、僕は自分自身を殴ってしまっていたようです。慌てるあなたや大人たちの心配そうな声が降ってくる中で、ああ、これから僕はきっと苦労していくのだろうと考えていました。

あなたとは随分と生活リズムが違う日々が続きました。朝起きて学校へ通い、夕方から夜にかけて帰宅する僕とは違って、あなたは昼に起きてどこかへ向かい、朝方ふらっと戻ってきていましたね。たまに数日帰ってこない日もありました。ひどいときは月単位で姿を見せないこともあったかと思います。この人はいったい何をやっているのだろうかと邪推していたものです。あなたは当時、随分と研究熱心な学生だったのですね。後々あなたの恩師から、酒の席であなたの話を聞かされました。家に帰らないどころかご飯も食べず風呂にも入らず寝ることも忘れ、放っておくと半月もそのまま研究に没頭していたと、笑いながら彼はどこか懐かしそうな顔で酒を呷っていました。彼にとってあなたは、どうにも忘れることのできない人のうちの一人だそうです。まったく困ったものだと彼はおもしろおかしく話してはいましたが、きっとあなたのことを好ましく思っていたのでしょう。どうにも抑えられない情のようなものが言葉の端々に見え隠れしていました。当時のあなたのご学友にも何度かお話を聞く機会がありましたが、どの人もあなたのことを話すときは、困ったような笑顔で、でも嫌ではない、そんな不思議な表情をしていました。ああ、あなたはきっとここで愛されていたのだろうと、その様子を見ることはなくても感じることができました。周りに恵まれたのか、あなた自身の人徳かはわかりませんが、僕は少しだけ誇らしい気持ちになりました。しかしそんなことを当時の僕は知りません。よれよれのくたくたになっ

て帰宅するあなたを見て、思春期の男心は日々理想をぶち壊されていました。あの頃の僕の純情を返してください。研究室で後輩に風呂に放り込まれたことも一回や二回ではないそうですが、僕があなたを何度も風呂に入れたことも忘れないでくださいね。年頃の僕にとっては最大の試練でした。やましい気持ちなど決してなくとも、そこは思春期です。どうしようもないこともあります。寝不足で湯船に沈んでいきそうなあなたをどうにかして引っ張り上げながら、僕は目隠しをしてあなたを丸洗いしたものです。おかげで今ではすっかり風呂に入れる技術が身についてしまい、実家の次郎は僕が洗うのでなければ風呂場に近づこうともしない程です。彼のふさふさの毛並みを僕の思うままにつやつやにできるのは役得ですが、その技術が身についた経緯があなたを風呂にぶち込んでいたことだと思うとなんだかなあと切なくなってしまうのです。

時々僕の友達が家に遊びに来ると、あなたが家に居合わせることもありました。普段はずっと研究室に籠りっぱなしだというのに、こういうときに限ってあなたは僕の期待を裏切るのです。友達はあなたを見て目を丸くして、どうしていいかわからないような顔をします。そんなときあなたは決まって、どこから持ってきたのだかさっぱり見当もつかないようなお菓子を僕と友達にくれましたね。おばあちゃんの家にいくと必ずあるような、名前さえもわからないようなお菓子が毎回、しかも全部種類の違うものが出てくるものですから、友達も驚いてはいましたが、僕が一番驚いていました。しかもこれまたよくわからないことに、今まで食べたお菓子の中で一番おいしかったのです。なんだこれはと騒ぐ僕らを見て、あなたがやけに嬉しそうに笑っていたのをうっすらと思い出す時があります。目の下に隈を作って非常に疲れたような顔をしているのに、

ご飯を食べない日が続いてその身体はすっかり痩せ細ってしまっていたのに、僕はそんなとき、あなたのことをとてもきれいだと感じていました。ほんの一瞬でしたが、確かにそう思っていました。その一瞬のあとには僕があなたの口に食べ物を押し込み風呂場へと追い立てるために、友達に変なものを見る目でしげしげと眺められるのが常でしたが、僕は少しずつ、そんな日常が嫌ではなくなってきていました。

僕が高校に進学すると、あなたはお祝いと称して0がいくつつくのかもわからないような高価な時計を僕の腕につけてくれました。何でもないことのようにふにゃっとした笑みを浮かべて腕時計をつけた僕を見つめるあなたに、しばらく僕は何を言っていいのかわからず、呆然としてしまいました。この人はなんでここまで僕にしてくれるんだろうかと、わからなくなってくるときがあったからです。自分のことはあまり気にかける様子もないのに、出会って二年の僕にどうしてこうも愛情を注ぐことができるのだろうかと、不思議でなりませんでした。こんな高いもの受け取れないよ、自分のお金は自分のことに使いなよと、あなたに言ってしまうことは簡単でしたが、言葉が喉の奥に突っかかってうまく出てきませんでした。それは魚の小骨のようなもので、もしもあなたがこの言葉を聞いたときに少しでも悲しそうな顔をしてしまったらと思うと、チクチクと刺すような痛みを僕に与えてくるのでした。かろうじて絞り出した僕のありがとうという言葉に、あなたは少しだけほっとしたような顔をしましたね。ああ、あなたもそんな可能性をどこかで考えていたのだなとわかったとき、僕は少しだけあなたに近づけたような気がしました。あなたと一緒に暮らし、時には世話を焼いたりもしましたが、どこか違う世界の人なのではない

かと思っていたからです。その時、あなたから腕時計以上の何か大きなものをもらったのだと、今でも思っています。あなたは気づいていなかったかもしれません。それとも妙に勘のいいあなたのことですから、気づいても黙っていたのかもしれません。あれから少しだけ、あなたを風呂に入れるときに優しくできるようになりました。少しだけですけれど。

中学生で始めたバスケを高校生でも続けていた僕でしたが、あるとき膝を故障して、選手生命を絶たれてしまったことを覚えていますか。誰が悪いわけでもなく、ただただ運が悪かったとしかいいようがない事故に、僕の気持ちはどこに向かえばよいのかわからなくなっていました。あなたに出会った時と同じように。しかしあのときと違ったのは、胸の奥がじんと温かくなるようなくすぐったい気持ちではなく、意味もなく泣きたくなるような消えてしまいたいような、行き場のないやるせない気持ちだということでした。当時のあなたは非常に忙しかったのでしょう。家にいないことが増え、僕と顔を合わせるのも週に一度あればよい方でした。けれど時々僕のためにお弁当が用意されている朝があって、それを見つける度にあなたがどうにも愛おしくなりました。僕の故障のことはしばらく知らずにいたあなたでしたが、むしろそのことが、いらぬ気遣いもなく普段通りに接してくれるあなたが、あの頃の僕の救いでした。

あなたは知らないかもしれません。僕がつらいとき、泣きたいとき、そっと差し伸べられる優しさに、僕がどれだけ感謝していたことでしょう。だからあの時、あなたの涙を初めて見たとき、僕は何があっても、これからは僕があなたを守り抜くと誓いました。

黒い影が一つ、また一つとやってきては頭を下げる。決まりきった文句を並べ立てる者もいれば、僕らをいたわる者、縋り付いて涙を流す者もいた。それに対して、柔らかい笑みで応える姉を見ながら、僕は制服のポケットに入った一枚の写真を握りしめた。

即死だったのだそうだ。再婚から三年と少し、ようやくとれた長めの休みで新婚旅行に出かけたときのことだった。帰宅途中、スピードを出しすぎたトラックが真っ直ぐに突っ込んできたらしい。僕らの両親は、いってらっしゃいと見送ったあの日の二人が嘘のような姿で帰ってきた。

知らせを聞いたとき、姉の声は少しだけ震えていた。けれど、年の離れた弟に弱いところは見せられないと思ったのだろう。すぐにいつもの調子に戻り、忙しくなるね、とだけ呟いた。僕がまだまだ子どもなものだから、喪主は姉が務めることになる。姉ちゃん、と声をかければ、大丈夫、心配しなくていいよとだけ返ってきた。きっと大丈夫じゃないのは、僕の方ではなかった。

姉は立派に喪主を務めあげた。親戚も両親の関係者も帰ってしまい、姉弟二人だけの夜が来た。二人だけなんて久しぶりだね、と言う姉は、これからはずっと二人か、と泣きそうな顔をして笑った。

「明日からは学校、行っていいからね」

「…まだやることあるんだろ。手伝うから。しばらく休んでも大丈夫」

「お姉ちゃん一人で大丈夫だって」

「こないだ部下の人が言ってた。相変わらず全然寝てないって。休めよ。片付けくらいなら俺だってできる」

「……なんでそういうこと教えちゃうのかなあ彼は…」
姉の部下は大学時代の後輩らしく、僕も何度か会ったことがあった。全然休まない姉になんとか休養を取らせようと、二人で共謀して実力行使にも出たことがある。あの人は一人で抱え込んでしまう傾向があるから、突っ走らせないように見ててあげてほしいな、と困ったように彼は笑っていた。姉のことを尊敬し、大事に思ってくれているのだろう。ぜひ協力します、と協定を結び、今では個人的にお話をしたり遊びに連れて行ってもらったりもする仲であったりする。姉には知られていないけれど。
「…姉ちゃんだけの問題じゃないから」
「学生の本分は勉強だよ？」
「姉ちゃんは無理しすぎ」
「わたしはもう学生じゃないからね」
「学生のころから無茶しかしてないな」
「…それを言われると耳が痛いね」
いつもより濃い隈が目立つ顔で、姉は困ったように笑った。まただいぶ痩せたな、と僕は思った。
「姉ちゃんは、いつもそうだ。自分ばっかり抱え込もうとする」
「…そうかな」
「もっと俺を頼ってくれてもいいのに」

「頼ってると思うけど」
「だめだ。もっと頼れ」
「え、ええー…」
「俺は、そんなに」
子どもじゃない。という言葉は言えなかった。それくらいには、自分が子どもであることを自覚していたし、出来ないことが多くあることも知っていた。
口をつぐんで黙り込んでしまった僕の頭を、姉が優しく撫でた。彼女にそんなつもりはなくても、子ども扱いされているような気がした。それを痛感せずにはいられないほど、この年の差は大きかった。
「ありがとう。ごめんね」
「…何が」
「あなたの気持ちは、とてもうれしいよ」
「子ども扱い、すんなよ」
「してないよ、と言ってもきっと、あなたは納得してくれないんだろう。それじゃあ明日一日だけ、一緒にいろいろ片付けてくれるかな」
手伝ってくれるかな、と言わなかったのは、彼女の優しさなのだろうと思った。
僕がこっそり握りしめた写真は、唯一の家族写真だった。まだ僕らが出会って間もないころ、写真を撮ろうと言い出したのは姉だった。なんでこの年にもなって、家族で写真なんかと思春期

の僕は嫌がったが、両親は特に異論もなく、四人で並んで写真に写った。僕は不機嫌そうな顔をしていた。姉がこう言いだしたのは、前の母親との写真が一枚も残っていないからだと、後になって知った。僕は不謹慎にも、彼女が以前の家族写真を持っていなかったことに感謝した。

夜中に僕がベッドを抜け出すと、リビングの明かりがついていた。こっそりと覗くと、姉が一人で写真を眺めていた。その表情からは何を考えているのかは読めなかった。まだ寝ないのだろうかと思っていると、少しだけ姉の肩が震えた。一筋涙がその頬を伝うと、僕は思わずその光景に背を向けて逃げ出してしまった。見てはいけないものを見てしまった気分だった。初めて見た光景だった。これまで一度も見せたことのない涙を、思いがけず盗み見てしまった。

僕はずるずるとその場に座り込んで、自分のふがいなさに苛立ちを覚えた。姉はきっと、これまで僕の知らないところで泣くこともあったのだろう。けれども、僕には一度もそんな姿を見せなかった。姉としてのプライドか、僕への気遣いか。前者ならば尊重してやりたかったが、後者ならばそんなものいらないと大声をあげて怒鳴り散らしてやりたかった。もっと感情を剥き出しにしてほしい。これ以上、一人で苦しまないでほしい。僕ももっと、強くなるから。あなたが頼れるような男になるから。僕らは家族なのだから。声に出さずに、姉の涙に僕はそっと誓った。

僕があなたの母校に進学すると決めたときは、あなたは目を真ん丸にしていましたね。僕は理系がからっきしだめで、あなたが研究している分野はこれっぽっちもわかりませんでしたが、あなたが過ごした学び舎で自分のやりたいことを学べるなら、これ以上の環境はないと確信してい

ました。案の定、あなたの恩師は数回だけ会った僕のことを覚えていてくれて、所属学部は違うのにとてもよくしていただきました。僕とあなたは似ているはずもないのに、やっぱりあなたの弟だと、あなたの恩師は時折懐かしそうに呟いていました。しかし生活面では弟の方がしっかりしているね、と豪快に笑っていたことも懐かしく思い出されます。大学の学費はあなたが出すよと言ってはくれましたが、僕は断固として受け取りませんでした。あなたは研究者として大成しており、金銭的な余裕はあったのでしょうが、あなたと対等に並ぶためには、甘えてはいけないと思っていたのです。アルバイトと奨学金でなんとか学費と生活費を捻出し、友人と遊ぶのもそこそこに勉学に励みました。また、家事全般を僕が受け持つようになり、大学生男子には珍しいほど家事のスキルが上がりました。この点は、あなたに感謝するべきなのかもしれません。時々ふらりと帰ってくるあなたが、僕の作った夕食を見て大喜びするのを見るのが、僕のささやかな楽しみでした。

そこそこにしていた友人づきあいですが、この年頃にもなると色恋沙汰の一つや二つあるものです。彼女ができて遊びに行く機会が増えると、あなたの食事を用意できることが少なくなりました。あなたがただいまと言って家に帰ると、部屋が真っ暗だったことも少なくはないでしょう。あなたと過ごせない時間を惜しく思いながら、僕は遅めの青春を謳歌していました。彼女と一緒にいるとき、偶然あなたに遭遇したこともありましたね。あなたは合点がいったように表情を明るくして、楽しんで、と一言残して去っていきました。そういえば、あなたに彼女の存在を告げていませんでした。それほどにもあなたと会話をする時間が減っていて、それぞれの時間をそれ

ぞれに過ごすようになっていたのですね。

あなたの色恋沙汰を聞いたことはほとんどなかったので、あなたは恋愛に興味がないものだとばかり思っていました。しかし、あるときあなたの左手の薬指にきらりと光るものを見つけたときには、口から心臓が飛び出るかと思いました。いつの間にそんな相手ができたんだ、どこのどいつだ連れてこいと、父親のような心境になったものです。結婚適齢期をそろそろ終えるかというあなたに恋人の一人や二人、婚約者だっていてもおかしくないはずなのに、僕の中のくだらない独占欲がそれを認めませんでした。家に帰っておそるおそる指環について言及すると、あなたが今まで見たこともないような顔で笑うものだから、僕は何も言えなくなってしまいました。僕にとっては、くだらない独占欲よりも、あなたの幸せが最優先なのです。心の底からおめでとうと言うしかありませんでした。

今だから言える話ですが、僕の初恋はあなたでした。あなたの世話を焼いたり、無意識の優しさに安堵したり、弱い一面を見つけたりするうちに、どんどんあなたが好きになりました。けれど、あなたのすぐ隣で一生寄り添って歩いていくのは、僕ではないとわかっていました。あなたの隣には別の誰かがいて、僕の愛したその笑顔を守っていってくれるだろうと、信じていました。それが今日この日、ようやく現実のものになります。——姉さん、結婚おめでとう。姉さんが、世界一幸せな花嫁になりますように。

正直、ひどい顔だなと思った。雛壇にいる姉は今まで見たこともないようなぐしゃぐしゃな顔

で泣いていて、隣で旦那さんが笑って頭を撫でていた。せっかくの化粧が台無しになっている。長すぎるかなとは思ったものの、たった一人の家族の晴れの舞台に込めた思いをわかってほしくて、姉に宛てた手紙をこの披露宴ですべて読み上げてしまった。僕が今まで知らなかっただけで、姉は案外泣き虫なのだった。少しは泣いてしまうかなとは思っていたけれど、声が出なくなるほど泣きじゃくるとは予想外だった。やりすぎた。

旦那さんと目が合えば、彼はよくやったと言わんばかりにいい笑顔を向けてきた。姉の結婚を知ってから対面したこの人はなかなかユニークな人で、姉の感情を引き出すのがとてもうまい。けれど、もしかするとここまで号泣させたことはないのかもしれない。いいスピーチだったよと褒められるのがくすぐったい。

ひどい顔の花嫁は息をするのも苦しいらしく、嗚咽を漏らしながら過呼吸気味になっている。なんて顔だ。これから新郎新婦紹介のビデオやら友人の出し物、それに新婦の手紙の朗読も控えているというのに、すでに彼女はクライマックス状態だ。どうしたものか。

気を利かせた司会が、花嫁のお色直しを場内にアナウンスした。エスコートはもちろん僕だ。読んだ手紙をポケットにしまい、姉に恭しく腕を差し出した。少しだけ茶化したように『エスコートさせていただけますか？』と囁けば、突っ込む余裕も残ってないのか首がちぎれそうなほど激しく頷き、僕の腕を乱暴にとった。会場を出るまでに姉は幾度となく躓き、友人や上司、同僚から苦笑いをもらっていた。しょうがないな、とみんながしっかりと通路を確保してくれるところを見て、ああやはり、この人は愛されているのだと実感した。そして、その彼女を手紙一つでこ

こまで号泣させたことが妙に誇らしくなってしまい、僕は少しだけ、歩くスピードを速めた。

やっと姉が落ち着いてきたのは、会場を出て十分後のことだった。泣き腫らした目は真っ赤に染まり、会場に戻るにはなんとも気まずい顔をしている。どう責任を取るべきか、と僕が悩んでいると、姉はひく、とまたしゃくり上げた。

「ちょ、もう泣くなよ…！」

「だって…あなたがあんな素敵な手紙を書いてくれるなんて、なんか、嬉しくて」

「…長かったのは謝るよ。あとであの手紙やるから、だから、今は忘れて普通にしてろよ。その顔で会場に戻れないだろ」

「ほんと？それじゃあ、家に帰ったらまた読んで泣かなくちゃ。せっかくの新婚初夜なのに、あなたのせいで台無しだ」

「その言い方やめろ」

ぐしゃぐしゃの顔でへにゃりと笑った姉に少し安堵し、崩れたヴェールを整えてやった。なんだか、自分たちが永遠の愛を誓う夫婦のように思えてしまい、どうにも気恥ずかしい。手紙に込めた思い通り、重度のシスコンの自覚はあったが、それを通り越してクラクラしてしまうほど、今日の姉は大層魅力的だった。それこそ、旦那さんにやすやすと渡してしまうのがもったいないほどに。

ヴァージンロードは、もちろん唯一の家族である僕が歩いた。隣に立つこの人は、今から僕で

ない誰かの妻になる。それが家族として嬉しいような、男として悔しいような、不思議な感覚が僕を襲った。僕の知らない顔をした一番身近な女性は、最初から僕のものではない。それをまざまざと見せつけられたようで、どうにも苦しい気持ちになったのだった。

化粧を直し、また化けの皮を被った花嫁が笑う。

「どう？きれいになった？」

「…きれいに化けたな」

「あ、ひどい」

ひどいと言いながら、またおかしそうに笑った。僕は軽口を叩きながら、そんな彼女をとてもきれいだと思った。

そっと腕を差し出すと、今度はしおらしく姉は僕の腕をとった。さっきまでの必死な様子が嘘のようだ。

「……ありがとね」

「お礼を言われるようなことは、何もしてないよ」

「だって今日は」

ああもう、その顔で笑うのはやめてくれ。

「あなたがわたしの父であり母であり、そしてたった一人の大事な弟なんでしょう？もう、感謝の気持ちしか持てないよ」

だからお礼の言葉しか出てこないよ、と笑った姉は、この世の誰よりも美しかった。

それからの姉はいつもの調子で、会場に戻ってからは友人と笑いあいながら式の進行を見守っていた。新郎新婦へのビデオレターが上映されたのだが、姉の部下の人が号泣しながらおめでとうございますと言っていて、この人は相変わらずだなと苦笑してしまった。両親の葬式の前、姉が無理をしていると教えてくれた人だ。その彼は今日も会場に来ていて、涙ぐみながら、「よかったですね、所長」としきりに呟いている。姉は企業の研究所で所長をしている。所長という肩書の割には、部下からの扱いはフランクだが、こういった場で泣いてくれる部下がいるということは、やっぱり姉は愛されているということなのだろう。

姉の親類の出席は僕だけのため、姉の友人の席に混ぜられていた。僕も見知った顔の人たちばかりだったので気は楽だったが、めでたい席だからと酒をしこたま飲まされた。元来酒が強くない僕は、ビールを小さなグラスで数杯飲まされただけで酔ってしまい、そこからの記憶が半分ほど飛んでしまっている。

ふわふわした気分の中で会場の音楽を聴いていると、周りの人々の様子がはっきりと見えてきた。僕に酒を飲ませた姉の友人は、普段は仏頂面で怖そうな人だが（その割に体格は小さいのでなんだかアンバランスだ）、今日は心なしか眉間のしわが穏やかで、この場を楽しんでくれているのかな、という気がする。姉の友人兼上司は、普段何を考えているのかいまいち読めないのだが、今日は普段よりも酒を煽って感情が見えやすくなっている。この人は普段から、姉のことを買ってくれているらしく、この人に褒められると、姉はそれはそれは嬉しそうな顔をしていた。

ぼんやりしている僕の足元に、ふと何かがぶつかった。なんだろうと足元に手を伸ばすと、小さな柔らかいものに触れた。そのまま机の下にもぐりテーブルクロスを少しだけめくると、そこには小さな姉弟がしゃがみこんでバツの悪そうな顔をしていた。

しまった、と口に手を当てる姉弟は互いに目配せをして、姉の方が小さな弟を後ろにさっとかばった。怯えながらも強い目をしている子だった。ごめんなさい、と呟いたその声が少しだけ震えていたので、僕は精一杯優しく笑って見せた。

「出ておいで、そこにいると他の人にもぶつかってしまうかもしれないから」

二人は困ったような顔をしていたが、観念してテーブルの下から這い出してきた。それに気づいた姉の上司が、いったいどこから入ってきたんだい？と面白そうに彼らに話しかけている。

遊んでいるうちに乱れた二人の服装を整えてやると、ありがとう、と弟の方がはにかんだ。そのまま姉弟揃ってどこかのテーブルまで戻っていく姿を、僕は手を振りながら見送った。

「まるで君たち姉弟のようだね」

姉の上司がそう言う声が、とても遠くに聞こえた。僕らにあんな小さいころの思い出はないから、重ねたくても重ねることはできない。

僕と初めて出会ったときのあの人はすでに大人で、僕には手が届かない存在だった。僕に真っ直ぐ向けられる行為が嬉しくて恥ずかしくて、毎日が刺激的だった。あの人がいなければ今の僕はないだろうと断言できるくらい、僕の世界の中心はあの人だった。いい年してこんな想いを抱いている弟なんて、気持ち悪いだろう。だけど、それでも僕は、今高砂で笑っているあの人が、

愛しくて仕方がないのだ。血がつながってなどいなくても、家族だから。
そんな思いをかき消すように、テーブルの上に残っていた日本酒をぐいっと呷った。慣れない酒はあっという間に身体に回り、またぼやけた世界に僕を連れて行く。
「ご来場の皆様、本日は新郎新婦のためにお越しくださり、本当にありがとうございます。ここで、新婦からご家族にあてた手紙を読んでいただきます」
だから、こんなアナウンスなんて、微塵も聞こえていなかった。
「わたしの父と母は、数年前に他界しました。当時亡くなった母はわたしの本当の母ではありませんでしたが、血のつながらない私に本当によくしてくれました。今、陸さんのご両親には、本当の父母のようによくしていただいています。また素敵な父と母ができ、とても嬉しいです」
姉の声が遠くで聞こえる。陸さんというのは、旦那さんの名前だ。姉さんが旦那さんのことを話しているのだろうか。内容が頭に入ってこないほど、酔いが回っている。
「父と母は、わたしにとても素敵なものを遺してくれました。それは、先ほどわたしに素敵な手紙を読んでくれた弟です」
少しだけ姉の声が上ずっているように聞こえる。
「弟とも、血はつながっていません。わたしたちは連れ子同士の姉弟です。年の離れた弟が急にできたので、わたしは嬉しくて嬉しくて仕方がありませんでした。当時中学生だった弟は恥ずかしがって逃げていましたが、それでもわたしは構いたくて仕方がなくて、弟に迷惑をかけてしまったこともあります。思春期なのに、よく嫌いにならなかったなと感謝の言葉しかありません。わ

たしは、研究者気質で家を空けることもしばしばでしたが、それでも弟はわたしの世話を焼いたり、わたしに関わろうとしてくれました。それが、何より、嬉しいことでした」
またしゃくりあげている。少しずつ、少しずつ、ふわふわした意識が鮮明になっていく。
「わたしが一番つらいとき、一緒にいてくれたのはあなたでした。わたしが一番幸せなとき、一緒にいてくれたのもあなたでした。……っ」
泣くなよ、姉さん、そんなに泣いたら、また化粧が崩れてひどいことになるぞ。それに、それにさ、
「わたしは今日から、陸さんと新しい家庭を築いていきます。でも、あなたはわたしにとって、かけがえのない、大切な家族です。本当に、本当に」
やめてくれ、それ以上言うのは。もう十分だ。十分だよ。
「……わたしと、家族になってくれて、ありがとう…っ！」
そんなの、こっちの台詞だよ、馬鹿姉貴。

息が苦しいくらい、みっともなく泣いてしまった。僕のテーブルにいた人はみな一言だけ、いい姉弟だね、と言っていた。姉の義理の両親からは、君ももうちの家族だよ、いきなり増えるからうるさいかもしれないけどね、と言ってもらった。ありがたい限りだった。陸さんには先に姉をよろしくお願いしますと挨拶していたので特に言葉を交わすことはなかったが、君に負けないように頑張らないとな、と彼は笑っていた。

両親と新郎新婦は先に会場を出てゲストに挨拶をするため、僕は一人で会場に忘れ物がないかを見て回った。会場のスタッフの人にお世話になりましたと挨拶をしてその場を後にすると、外のお見送りは姉一人になっていた。

「あれ、姉さん一人だけ？」

「うん、もうみんなは二次会に動き始めたから」

「花嫁が先に動かないとだめだろ？ウエディングドレス、着替えるの時間かかるんだろ」

「そうだね、でもちょっとだけ」

そう言って姉が差し出したのは、手紙だった。

「これをあなたに渡したかったんだ。受け取ってくれるかな？」

「そりゃあ、いいけど…」

「あなたの手紙も、ちゃんとちょうだいね」

「……え」

「約束、したでしょ？」

軽く指切りをして、姉はドレスの裾を翻しながら控室へと戻っていった。

手紙を手に残された僕は、渡されたものに視線を落とした。手紙は封筒にきれいに入れられていたが、裏面に小さな字で、家族だけの秘密だよと書いてある。

何の秘密だよと思いながら封を開けると、姉のきれいな字で書かれた先ほどの手紙が出てきた。読み上げていた言葉を思い出しながら手紙を読んでいると、最後に読み上げた言葉の後、もう1

枚手紙が続いているのを見つけた。その言葉を読んだ瞬間、僕は今日一番、してやられたと思った。

『本当は、どんどん成長して魅力的な男性になっていくあなたに、ドキドキしていたこともありました。内緒だよ?世界で一番、愛しい弟へ』

反射的に駆け出した足は止まらなかった。長年抱き続けた家族だけの秘密を打ち明ける日が、僕にもついに訪れたようだった。

（教育学部小学校教員養成課程四年）

第七回東光原文学賞優秀賞受賞作品

昼間の星の陰で

黒瀬　優真

星が夜を飾る。都心から離れただけあって、思った以上に空気は澄んでいる。星はすぐそこにはっきりと見えているが、手を伸ばしても届きはしない。あれから何度空を切り続けたことだろう。

田舎と言っても人の明かりは夜空を侵食し、明日が今日になってすぐの今でも、私に無数の影を落としている。星を追い掛けて人工の明かりが少なそうな川沿いにやって来たが、無駄に靴底を擦り減らしただけだったようだ。それに川沿いに並ぶ家々に取り囲まれている様で、圧迫感を受ける。

こんな星が綺麗な夜ぐらい、人は星を眺めるべきだろう。科学の発達とともに星は見えづらくなっているのだから。

ふと、予備校生時代の思い出が蘇る。それは今でもはっきりと頭の中に残っていて、たとえ何かの拍子で忘れる事があったとしても、私の心から消える事はないだろう。去年の夏の終わりから、たった数日間の物語だ。そこで私の人生は進み始めた。

冷房が嫌に冷たい風を吹き付ける。自販機で買ったペットボトルのお茶はほとんど飲まなかった。結露した水がみるみると机を侵略し、広げた参考書の居場所を奪っている。もう、帰り時なのだろう。椅子のクッションもくたびれている。乾いた鉛筆の音だけが響く自習室。ここで声を出す事は忍びないが、友人の中島には声を掛けておく。

「私はもう帰るよ」

そう言いながら筋肉質な背中を叩くと、中島ははめていたイヤホンを片方外した。どこかで聞いた事があるようなクラシックがノイズとなって耳に届く。おそらくその音量ならば私の声は掻き消されているだろう。だが、用件は理解してくれていたようで「俺はまだ残るよ」と一言だけ小声で囁くと、また参考書とにらめっこを始めた。すでに大きな肩をリズムに乗せ、自分ひとりの世界に入っている。あの勉強法で成績が上がると言うのだから羨ましい。

中島は予備校で出来た唯一の友人である。私も中島も医学部を目指すコース、つまり、この予備校でトップのクラスに属しているが、入校当初は共に努力でしがみ付いていた部類だ。一度読めば理解出来るような天才タイプではない。中島は一見ふざけた勉強方法だが、一瞬の時間が出来れば自習室に向かう様な真面目な人間だ。

私は入校前に友達は作らないと決めていた。友達とお喋りする余裕はないと思ったからだ。だ

が、気付けば中島は隣にいた。中島は障害どころか、いい相談相手にもなった。元々は野球部のエースで成績優秀、雑学系の知識も多く、何より他人の価値観を否定しない。皆からも頼られ、高校時代から色んな相談を受けていた。今では私と医学部の推薦の奪い合いをする良きライバルでもある。この予備校には指定校推薦の様な物があり、それに選ばれれば合格率は高いのだ。勿論、選ばれるまでは厳しい道程だが、中島と競い合う内にそこまで進んでいた。

自習室の時計を見るといつもより少し遅いぐらいだった。集中し過ぎていたのかもしれない。よく見ると、電池の残りが少ないのか、秒針は奇妙な動きをしていた。自分の腕時計に視線を落とすと同じ時刻を指している。こんな時計でも時刻が分かるのに、お前には分からないのかと秒針に馬鹿にされている気がした。

濡れたペットボトルを入口のゴミ箱に放り込み、外に出る。ゴミ箱は空だったようで、底に当たって大きな音がした。

陳腐な絵が描かれた見慣れたバスに乗り込む。椅子が汚れていない事を確認し、疲れた腰をゆっくり沈める。汗で濡れた服が肌に張り付き気持ちが悪い。肺に溜まった空気を吐き出す。

私はこのバスが嫌いだ。地元では南北問題と揶揄されていた。南側のバス停と北側のバス停では乗り込む人々が違う。南が県有数の進学校が集中する東に、北がそれらの滑り止めの学校に向かう。私は南側だったが、北側の人間の視線が苦手だった。嫉妬とも嫌悪とも違う、形容し難い目をするのだ。学校によって将来の職業がほぼ決まっている以上仕方ないと言えば仕方ないのだ

が。
ふとバスの中を見渡すと見た事のある顔がこちらを向いていた。同じクラスの青年だ。身長は低く、華奢で幼い顔。さらに目はまん丸で子供らしさを強調するばかりか、可愛らしいという印象まで与えている。だが、その目をよく見ると、何かを秘めているような鋭さもあった。外見だけならばかなり女性に好まれそうなのだが、彼はいわゆる変人であり、話の種にしかならなかった。
彼には志望する職業がないというのだ。昔、将来の夢などと恰好悪く呼ばれたあれがない。風に聞いた話で信憑性はないが、自分でなりたいものを見つけきれず、取りあえず医者を目指していると。何とも時代と逆行した生き方だ。頭がおかしいとしか思えない。
だが、現に私と同じクラスに属せている以上、医者は射程圏内である。いわゆる天才にカテゴリーされる人間なのだろう。
そんな悪影響しか与えなさそうな人間が笑顔でこちらを見つめていた。あからさまに私に用事がありそうだが、気付かないふりをしておく。関わるべきではない。くすんだ窓を見つめる。
「やあ、赤尾君。僕は原田。今の感じじゃ僕の事は知っていたみたいだね」
やはり話し掛けてきた。流石に無視するわけにはいかないだろう。
自分の事を知られているという敗北感を感じる。それに、意外にもこの原田という男は周りからの自身の評価も知っていたし、私がどう思っているのかも瞬時に理解したようだ。対して私は原田に関して噂程度の事しか知らない。勝算が見えない。

「何の用だ？」
先に聞く。質問ではなく、特別な用が無いなら関わるなという意味だ。嫌悪感を全面に出しているが、原田は顔色一つ変えない。
「そうだな……。単刀直入に言うと、僕はマニュアルに従うのが嫌でね。何かいい方法を探していたんだ。そして、そこで起業するという結論に至った。僕と一緒に起業してほしい」
そう言いながら隣に座ってきた。無意識に上体が避ける様に傾く。だが、敗北感に不快感が混ざり、次の瞬間には怒りに変わっていた。そんなふざけた理由で私の人生を棒に振れとでも言うのか。舐めている。体を原田の方に傾け直す。
「ふざけるな」
再び滲み出してきた汗を手で拭いながら言う。最後に声を荒げたのは何歳の頃だったか。
言い終わった後も、原田の目を睨み続ける。原田は頭がおかしいのかもしれないと思っていたが、どうやら本当に狂っているようだ。マニュアルに従えば全て上手くいくのに、それに反抗したいと言っている。それが格好いいとでも思っているのだろうか。
「君は職業適性の評価は憶えているかい？」
原田は私の威嚇を笑顔でかわし、問い掛けた。私は予期せぬ切り返しを受け、戸惑いで一時怒りを忘れる。数秒の間が流れた。
「医者に適性があったことしか憶えていない。そもそも医者以外になるつもりは、ほんの少しもない」

冷静を装い、はっきりと断言する。曖昧な返事では付き纏われるだろう。今ここで原田とは縁を切りたい。

私の親は医者だ。親はほぼ幸せのマニュアル通りに生きているような人で、実際に幸せな生活を送っている。私もそうなりたいのだ。

「Bランク。それが君の医者の適性だ。まあ、Dランクまでは適性があると言えるからね。でも、君は起業家でSランクが出ている。もちろんだが、この予備校で一番高い。ちなみに僕の起業家判定はAランクだ。それでも中々だろう？」

本当に全員の判定を知っているのだろうか。嘘でないとすれば、どのようにして数百人分も調べたのだろうか。

「不思議そうだね。君たちが予備校に提出した物を盗み見たんだよ」

なるほど。だが、保管されているデータに侵入したということになる。相変わらず子供の様な無邪気な笑顔を浮かべているが、想像以上に得体が知れない。

「まあ、そんな事はどうでもいいんだ。本当にSランクが出たのに覚えていないのかい？」

正直、医者以外には興味すらなかった。Sランクなんてそうそうお目にかかれる評価ではない。それにマニュアルが出した評価だ。恐ろしく正確なのだろう。だが、幸せになる方法で検索すれば、そのマニュアルに起業家や芸術家などは否定される。リスクが大き過ぎるのだ。だから、たとえSランクでも、ただ幸せになりたいだけの私に起業家を目指すメリットはない。

「覚えていない。それになんと言おうと起業なんかするつもりはないから、もう話し掛けないで

くれ。それにマニュアルに従いたくないと言いつつ、既にマニュアルの言い成りじゃないか」
相手に少しでも不快感を与える事で優位に立ちたい。矛盾を指摘する。原田は何も知らない子供を馬鹿にする様に笑った。原田は出会ってから常に笑顔だが、それでも上手に感情を表現する。今のは軽蔑か。
「違うよ。利用しているだけだ」
「結局、私たちと同じじゃないか」
「違うよ。君たちはマニュアルに踊らされているだけだ」
何を言っているかは分からないが、馬鹿にされている事ははっきりと伝わってきた。一時、忘れていた怒りを思い出す。
「それに僕はマニュアルだけじゃない。君を見ているんだ」
「私を見ているのなら無駄な事は分かるはずだ。いい加減にしろ」
「君は君自身を見れていないね。君が医者になりたいと言っているからって、本当に医者になりたいとは限らないだろう？」
やはり、意味が分からない。だが、こいつと関わってはいけない事は火を見るより明らかだ。むしろ、真剣に怒っている自分が馬鹿らしく思える。その事に気付くと急に冷めた。
今となっては、知り合いに原田と話している姿を見られていないだけありがたい。
「一度だけ、ちゃんと職業判定を見てほしい。じゃないと毎日予備校で説得を続けるよ」
ほとんど脅迫だ。だが、この男は人の性格を理解する能力には長けているようだ。ここは大人

しく従うべきかもしれない。
原田はそれだけ言うとバスを降りた。親しくもないのに手を振りながら去って行ったことで、私は何とも言えない気分にされた。

帰ってからマニュアルに職業診断をしてもらう。結果は原田の言うとおりだった。起業家Ｓランク。詳しく言えばＩＴ系。なるほど。確かにプログラミングは得意だ。何より楽しい。だが、だからと言って趣味を仕事にするつもりはない。それで苦しい生活を送ると言うのなら本末転倒だ。まあ、もし起業に成功すれば、好きな事をして、高収入を得る事が出来るのか。流石に楽観的過ぎるな。
「職業診断か。どうした？」
父に声を掛けられる。まるで悪い事を親に見つかった子供の様な心境だ。
「医者の適性がＢか。悪くはないだろう。不安か？」
血は争えないようだ。父にも医者しか見えないらしい。いざ意識してみると、滑稽な話だ。笑えはしないが。
「いえ、ちょっと気になりまして」
「そうか……。まあ、変な気は起こさんようにな」
子供の考える事は全てお見通しのようだ。実際に父の背中だけを追い掛けている。父の知らない道は通っていない。

もちろんです。聞こえるか聞こえないかの声で囁いた。返事は冷蔵庫の重いうなり声だった。

「はっは。あいつらしいな。今はそんな事を思っているのか。悪い奴に目を付けられたな」

次の日、中島に相談すると、意外な反応が帰って来た。休み時間を奪うのは申し訳がなく、昼食時に声を掛けた。それでも中島は大食いの早食いで、食堂で見つけた時には既に大量のご飯を粗方飲み込んでいた。私なら、流体でも出来ない所業だ。

友達は多いのにこうして一人で食べていたのは、誰も中島に食べる速度を合わせられないからだろう。

「お前も勉強が忙しいだろうが、相談に乗ってくれてありがたいよ。で、知り合いのように感じたが」

いつもなら中島は自習室に居る時間で、思ったより相談が長引いた。それに推薦が貰えるかはもうすぐ決まる。イラついているかもしれないと思ったが、中島はやけに笑顔だ。まるで親しい友人を思い出している様に。

「高校が一緒だったからな。まあ、原田も高校の時は友達も多かったんだ。考え方は相変わらず独特だったが、俺はそういうの否定しないからな。よく話していたさ。俺がクラシックを聴くのもあいつの影響だ」

世の中は狭いと言うが、本当に狭いのだな。閉じ込められているとも感じる。

「あいつの人生は中々壮絶でな。別にマニュアルを憎んでいるわけではないんだろうが……、いや、憎んでいるのかもしれないな」
高校時代は仲が良さそうだが、原田の考えを完全に理解出来てはいないようだ。だが、相談の論点はそこではない。憎んでいようが憎んでいまいが、私の人生設計を崩されなければそれでいいのだ。
「で、原田に私を諦めてもらうにはどうしたらいいと思う？」
「まあ、待てよ。少し話そうぜ。お前って『時計』を見た事はあるか？」
中島は最後の一口を飲み込んでから、聞いた。
中島が言う時計があの時計ならば、一日で何度も見る。去年の合格発表の時は、直前の五分で百回は見ただろう。だが、わざわざ見た事があるか聞かれるような時計の存在を私は知らない。
「時計ってもしかしてこれの事か？」
腕時計を見せる。父から貰った物だ。基本的に寝る時以外は外さない。地味だが、別の見方をすれば、どんな服にも合わせられる。
「そうだ。それって自分で選んだのか？」
「いや、父からの誕生日のプレゼントだ」
中島は笑いを堪えるように、「じゃあ、見たのは貰った時の一回だけかな」と言った。私が話の内容を理解出来ないのが楽しいらしい。
私はイライラしながら、残りの昼食を口に運ぶ。

「人はね。時計じゃなくて、時刻を見ているんだ。原田が言っていた話だ。そうだ、お前は自習室の時計を憶えているか？」
「電池が切れかかっていて、秒針の動きが変だった」
特に意識せずに答えたが、一瞬の間をおいて、中島は驚いたと口にした。そして、本当に驚いた顔をしている。未だに話の内容を理解していない私は、その一瞬ですら煩わしいと感じる。
「で、どういう事なんだ？」
「お前が話の流れを崩したんだがな。よし、えっと……」
そして、中島はちょうどの椅子の後ろを通った人に声を掛ける。私の知らない人だ。
「自習室の時計見た事ある？」「もちろん」「秒針あった？」「え？えっと……」「形は丸？四角？」「……」「文字盤の数字ってどんなのだっけ？」「覚えているわけがないだろ」
中島は答えてくれた人に礼を言った。その人は私以上にキョトンとしていたが、自分が用済みなのだと分かると去って行った。
「な？」
中島が勝ち誇った顔で振り返る。
「普通はそうなんだよ。結局、時計なんか時刻を知るためだけの道具だ。わざわざ時計そのものを見る必要はない。人が時計自体を見る事なんて、買う時や貰った時ぐらいだ」
それか相手の年収を知りたい時かなと茶化して付け足した。
「昔、原田が言っていたんだ。僕は時刻だけじゃなくて、時計も見ているんだって。本当の時刻

を知るためには必要な事だって」
「無駄な事だな」
いかに変人かよく分かる。時刻なんて思いっきりずれていれば、すぐに気が付く。時計を見る度に無駄な時間を浪費するとは。
「でも、これは時計に限った話じゃないんだよ。これも原田が俺に言った言葉だ。俺もその時はお前と似たような事を言ってな。まあ、針が十三時を指しているからって、本当にそうとは限らないだろ。壊れている可能性もある。それから俺はいろんな物の時刻ではなく時計を見ようと思ったが、そう簡単に出来る事じゃなかったぜ?」
なるほど。話の意味はようやく理解した。原田の考えは『赤尾君は医者になりたいと言っているが、実際にそうとは限らない。心の中を覗かないと分からない』という事なのだろう。馬鹿げている。ストーカーとかはこういう心理で動いているのだろうな。
「ありがとう中島。まあ、原田の考えは分かった。私の時計もあの時計も十三時の十分前。間違いなく十分前だ。次の教室に向おう」
空の器を持って席を立つ。中島は何か言いたげな顔をしていたが、口を開くことはなかった。

「やあ、赤尾君。偶然だね」
「本当だ。偶然だな」
バス停に着く直前で声を掛けられた。正直、バスに乗ってくると思っていたため、油断してい

た。だが、動揺を悟られたくはない。周りを見渡すと、そこまで仲も良くないが顔見知りの予備校生がこちらに向かって来ている。それと同時にバスも来る。

「乗ろう」

本当はこんな得体の知れない男と、逃げ場のないバスに乗り込むのは嫌だが、一緒にいるところが噂になるのはもっと嫌だった。

「まあ、僕もそう言おうと思ったんだけどね。僕から言い出したら、乗らないでしょ？」

原田は首を傾げながら得意気に笑う。原田にペースを握られている事よりも、その事をアピールされている事の方に腹が立つ。

バスの中に知り合いはいないが、逆にここを見られたらどうなるのだろうと不安になる。一見、仲良く一緒に帰っている。そもそも原田の家はこちらなのだろうか。

席はたくさん空いているが、座る事には抵抗がある。

そのままの状態で数分が過ぎたが、一向に話し掛けてくる気配はない。このまま私が降りる駅まで粘ってもいいが、長期的に見ると私の損害だろう。原田の頭の中がどうなっているのかますます分からないが、何にせよ関わりを切らなければならない。

「先に言っておく。私は本当に医者になりたいんだ。心の底からな」

「どうして？親に言われたから？」

まるで、自分は答えを知っていると言いたげな顔だ。無駄に大きく手を動かしているのも皮肉だろう。それもあるが、違う。

「幸せになりたいからだ」
「別に医者にこだわる必要もないでしょ。幸せになりたいだけなら。それに所詮Bランクのくせに。起業家ほどの才能はないと言われているんだよ？君が愛するマニュアルに」
なるほど。怒らせようとしているのか。それで私の本心を探ろうと。時計を見ようと。相手の考えが読めてしまうと、一気に精神的優位に立てる。
そうこう言っている間に降りるバス停に着いた。もう話を終わらせなければ。そう思ったが原田も降りる素振りを見せる。
「起業なんて、どんなに才能があっても失敗するリスクが付き纏う。だが、医者には免許を取れば誰でもなれるんだ」
降りながら吐き捨てるが、原田は付いてくる。
「どうしてリスクを恐れるの。失敗してもやり直せばいい」
なるほど。天才の考えか。残念ながら凡人にそれは出来ない。
「失敗したらそこで終わりだ。そこからやり直せるほど、私は強い人間ではない」
「それは失敗に怯えて進もうとしないだけだろう？」
こういうのは勇気の押し売りとでも言ったか。落ちたら怪我をするような一本橋に辿り着いた時、行き止まりだと感じる人間は大勢いる。そこで前に進める人間はすごいと思うが、そうなりたいわけでもないのだ。
中島なら分かってくれるだろう。だが、原田は進む事が正しいと信じて疑わない。そして、そ

の価値観を周りに押し付ける。
「お前の考えは大体分かったよ。価値観の押し付けは良くない」
「君は視野が狭いよ。幸せの形が一つだとでも思っているのかい？」
もう私を怒らせようという感じはなくなっていた。笑顔は消え、代わりに哀れみが浮かんでいた。初めて見た顔だ。
「赤尾君。君はマニュアルを見ているのかい？それともマニュアルに体を乗っ取られているのかい？まるで機械だな」
なぜそんな目をするのだろうか。
ふと、視線を外すと北側の人間と目が合う。今は帰りのラッシュなので、北と南の位置関係は逆だ。こちらの話は聞こえていないはずだが、睨まれているような気がした。まるで黙れとでも言っているように。私も原田を睨む。何も、目で言葉を伝えられるのは彼らだけではない。原田は私の言いたい事を理解したようで、去って行く。せっかく消えてくれたのに、この像を結ばないもやもやは何なのだろうか。

「はっはっはっはっは。振り回されているなあ」
中島に話すと、爆笑であった。昨日と同じで昼食の時に話し掛けた。周りの人は大きな笑い声に箸を止め、こちらに注目している。

「何がそんなに面白いんだ？私は何も楽しくないぞ」
箸の先を中島に向けて聞く。行儀が悪い事も分かっている。
「原田にそれだけ付き纏われている事と、そう言えばお前ら正反対の人間だったなと思って」
確かに似てはいないが、反対でもないだろう。
「あいつは自分自身の幸せを自分で探して掴みたいんだ。そしてお前は皆から幸せだと言ってもらえる状況に地図を見ながら進んでいる」
何だか、自分が悪いと言われている様に錯覚する。
「まあ、俺はどっちの考えも分からない事はないさ。他人からどう思われようと幸せならそれでいい。答えを見ずに手さぐりで進むから面白い。お前も理解出来ない事はないだろ。好きな女とならパンを分け合っての生活でもいいと言う奴もいるんだ」
中島は丁寧に両手で箸を置き、私を指さす。皮肉が上手だ。
「お前みたいに普通の幸せに向って答えを見ながら直線距離で進む奴もいる。今の時代はそっちが当たり前だろ。マニュアルという答えが目の前に置いてある。それで見ないと言うのなら、いつまで反抗期を引きずっているんだという考え方も出来る」
マニュアルか。誰が名付けたのだろうな。
言ってしまえば、人工知能と他の電化製品を結び付けただけの簡単な物だ。だが、人工知能の発展に従いその性能は格段に向上した。内容によって精度に差はあるが、何を聞いても教えてくれる。

特に人格についての問いなら精度は驚くべき物だ。だから職業診断は皆が利用する。職業など簡単に変える事が出来ない物を決めるのには勇気がいる。だが、マニュアルを使えばすぐに正解を複数教えてくれるのだ。答えしかない中から選べばいい。

優秀な高校では入試の段階でマニュアルの職業適性テストがあるところも多い。たとえ、どんなに頭が良くても、花形の職業に軒並み適性が出ていなければ、南のバス停から乗り込むことは出来ない。つまり、学力だけで才能がなければいい高校には行けないのだ。

さらにマニュアルがすごいのは、そこからどうすればいいか近道を教えてくれる事だ。学問にさえ王道はある。もちろんマイナス面もあった。高校によっては不登校率がかなり高いし、夏場に長袖を着ている子も多い。確かに学力と違い、変えようのない適性で落ちた子は辛いだろう。だが、それを無視出来る程プラス面は大きい。

「私はマニュアルに反抗するのは馬鹿だとしか思えないな」

「あー。原田がしていた物語の話をしていいか？ふと思い出した。昔、あいつが誰かから聞いて、忘れられないらしい」

「いいぞ」

私から相談を振っておいて、聞かないわけにはいかないだろう。

大昔の話、陸の孤島だが自給自足で生活出来る閉じた土地に人口百人程の村があった。成長して町になることも出来ないちっぽけな村。だが、環境はよく、生活は豊かな方だった。ただ一つ

の問題を除いて。
「呪い」である。
こんな自分になりたい。そう願うと自分そっくりの分身が現れて、願ったとおりの才能を持っているという。

「それのどこが呪いなんだ？便利じゃないか」
思わず中島の話に口を挟む。今回は中島をすぐに見つけられたため、私ももう食べ終わっている。
その分身が歯向かわない限り、害は無い。何もしてくれなかったとしても、自分自身を見て、技を盗むことが出来る。
「話は最後まで聞けよ。所詮作り話なんだから」
そう言って、中島は話を続ける。所詮作り話だと茶化した口からは、とても無駄話とは思えない雰囲気が醸し出されている。

集落には変わり者の老婆がいた。村人は皆便利な分身を作ったが、老婆だけは出せなかったという。
分身は奴隷ではなかったが、歯向かう事もなく、家族のような関係だった。そして、分身に対する憧れが消えると、分身は自然に消える。同時に現れるのは一人一体まで。完全に無害のはず

だった。

ある日、村の生活がかなり厳しい事に気付いた。確実に人口が減っている。だが、消えた人間を思い出す事も出来ない。

もちろん、真っ先に呪いの副作用が疑われた。そして、村では集団行動を命じられた。だが、村の過疎化を止める事が出来ない。死ぬのならまだいいが、消えるのは嫌だ。人々の恐怖は伝染し、魔女裁判を生んだ。あの変わり者の老婆が犯人に違いない。

村人は思い思いに武器になりそうな物を手に、老婆に詰め寄った。そして、老婆は観念したのか重い口を開いた。私が見てきた真実を知れば、さらに人は消えるだろうが、それでも良いかと。

村人は得体の知れない恐怖を振り払いたかった。口々に聞かせてくれと言い始める。それで、老婆は頷き、村人に問い掛けた。お前たちは分身の事をどう思っているのかと。

「お前だったらどう思う？」

不意に質問を投げ掛けられた。

「便利だと思ったさ。そんな副作用があるなら使いたくないが」

中島は笑う。だが、楽しそうではない。

「さっき言っていたな。だが、村人はそうじゃなかったんだ。目の前に完璧な自分がいるんだぜ？頑張ってもなれない憧れの存在に自分じゃない自分がなっているんだ。そりゃあ、殺してしまいたいと思うだろう？」

背中がぞくりとした。

老婆はもう一度村人に問い掛けた。本当に殺してしまいたいと思った事はないのかと。数人は少しだけあると答え、震えだした。もし本気で思っていたら消えていたのだろうと気付いたからだ。

老婆は見てきた物を話し始めた。

ある者は分身を殺してしまったと。それでも分身は現れ続け、殺し続けた。その結果、次第と存在が薄くなり、消えてしまったと。

ある者は分身を殺せなかったと。そして願ってしまった。私を殺せる私になりたい。その結果、分身に殺されてしまったと。

ある者は分身を手本にし、その高みに近づいて行ったと。その結果、分身と同化し、消えてしまったと。

そして、なぜかそれらの人々は記憶からも忘れ去られたが、老婆は憶えている事が出来た。

そこから村人が全て消えるまで時間は掛からなかった。

もぬけとなった村。老婆一人で生きていくのは無理があった。老婆は消えた村人たちの家から使える物をかき集め、別の村を目指す。

そして、無事に辿り着き、幸せな生活を送った。

「さあ、どう思った？」
「そんな簡単に別の村に移れるんだったら、さっさと他の村に移れば良かったと思った」
中島は感心したようだった。頷いている。
「お前、面白いな。実は最後を変えさせてもらったんだ。本当の終わりは最後の老婆も消えてしまうんだ」
「なぜそんなことを」
「ちょっと試したかったんだ。ああいうエンディングでどんな反応を示すのか。まあ、予想通りの反応だったわけだが、原田ならこう言っていた。『いや、幸せな生活ってどんな幸せだよ。そこを語れよ』って」
確かに分かりづらいかもしれない。だが、単にそれだけではないような真剣さがある。中島は私の目から視線を外さない。
「お前は文字通り、絵に描いたような幸せを幸せだと思っているんだ。原田は別の話の時だが、『それって他人から見て幸せそうな生活だったのか？それとも本人が幸せだと口にしたのか？どっちにしろ、具体的に話してくれないと僕には分からないよ。君たちには分かっているのかい？』そう言っていた」
そういう事か。少しだけだが、原田の考えに興味が出てきた。
「それで、お前はどう答えたんだ？」
「分かってはいないさ。だけど幸せになったんなら、その物語はそれで十分納得が出来る。たぶ

ん、多くの人が思い浮かべる平均的で普遍的な幸せの生活じゃないのかと」
中島が当たり前のように言う。私が求めている物はそれなのか。言葉にするとここまで陳腐な物だったのだな。
「なあ、中島。お前の意見はどうなんだ？何が幸せだと思う？」
「残念だが時間だ。次の教室に行くぞ」
本当はもう少し時間はあったが、教えてはくれないらしい。

「おや、赤尾君じゃないか。奇遇だね」
「待っていたよ」
驚いているようだ。動揺を隠さない。初めて私のペースだ。
ちょうどバスが来たが、乗りはしない。人に見られてもいい。
「お前の考えに興味を持ったからな。聞かせてくれよ。お前はマニュアルに逆らいたいわけじゃないんだろ？何がしたいんだ？」
「そうだな……。一言で言うなら……人間らしく生きたいのかな」
私に問われてすぐは嬉しそうな顔をしたが、答えには詰まる。自分でも理解出来ていないのだろう。頻りに鼻の横を掻いている。
「じゃあ、お話をしてもいいかな？僕は人と話すのが大好きなんだ」

「中島からの話でそんな気はしていた。関係のある話なんだろうな」
「どうだろうね。あるバイオリン職人のお話さ」
そう言ってすぐに記憶を辿るようにして、話を始めた。
「腕利きのバイオリン職人でね。職人仲間からも一目置かれていたんだ。だけど、それ以外は不器用でね。結果、家庭は火の車。妻は幼い一人息子を残して、どこかに行ってしまった。男手一つでの子育ては難しい。両親に頼ればいいのに、そんなとこまで不器用で」
無理やり作ったような笑顔だ。あれだけ笑顔が得意だった原田がこんなありきたりで、失笑が起きてもおかしくない話をそんな顔でするとは。
「結局、最後は病気で死んでしまったよ」
乾いているのは顔の表面だけのようだ。傷口を包帯で隠そうと思うあまり、なおさら痛々しさが増している。
「視点を息子に代えよう。その息子は父の背中を見て育ち、幼い頃からバイオリンに触れていた。門前の小僧は気付けばバイオリンを作れるようになったんだよ。それで、父は焦った。息子が自分の二の舞になろうとしている事に。そして、父は息子を工房に入れないようにする。小僧は門前に近寄る事すら許されなくなったんだ。そこからは技を盗む隠すの攻防戦さ」
そんな顔をするぐらいなら話を止めたらいいと思うが、私も聞き続けるのが礼儀だろう。立ち続けで辛いが、姿勢を変える事すら申し訳ないと感じてしまう。
「だけど、息子は勝手にコンクールで賞を取る。中二の時だったかな。それから、趣味の領域で

ならバイオリンを作る事を父に了承される。その頃にはバイオリン職人との繋がりも出来ていた。楽しかった。そして、そんな時に科学の手がバイオリンにまで及んだ」

まるでその事が悪い事だったように言う。

「君はバイオリンについてどれくらい知ってる？」

「一般人並だ。詳しくは知らない」

「じゃあ、簡単に話そう。大昔になるんだけど、それこそ本当の天才がいたんだ。いわゆる名器ばかりを生み出した。名器の数で言えばそんな伝説の存在にはならない。でも、その人は様々なジャンルの名器を生み出した。意味が分かるかな？」

「同じ形の名器を量産する事は簡単だが、形を変えた物を名器にするのは難しいという事か」

「ほぼ正解だよ。楽器にも性格があるんだ。ただ音が大きければいいわけじゃない。ただ音の幅が広ければいいわけじゃない。演奏者によって欲しい物は違うんだ。だから、その人は伝説だった」

『伝説だった』か。そう言った瞬間、原田は拳を握っていた。

「研究でそのバイオリンには共通点がある事が分かったんだ。簡単な事だったよ。もちろん完璧に真似は出来なかった。でも、真似した僕のバイオリンは急激に良くなった。それはとてもとても残念な事だったよ」

残念？良くなったのにか？

そして、遂に息子の事を僕と言ってしまった。感情を堪えて、笑顔を作って、話し方まで考え

るのは流石に難しいのだろう。その事に気付きはしたようで、もう自分の事として話を続ける。
「そして、父が死んだ。死ぬ間際に、もう職人になる事に反対しないとも言われた。それから、僕の悪いところを全部言われてね。その通りにやってみると、本当にいい音を出したんだ」
もうここまで聞けば分かる。作る気を無くしたのだろう。
「そこから作らなくなってね。そしたら分かるかな？」
今はこれまでの笑顔を捨てている。皮肉などではなく、私であれば理解出来るのかといった顔だ。はたして、何の事を言っているのだろう。ああ、そういう事か。
「分かったみたいだね。父が死んだとたんバイオリンを作らなくなったんだ。皆考える事は一つだよ。職人仲間との繋がりも切れた。まあ、もう一回作ってやれば証明は出来たんだろうけど、もう作る気はなかったしね。だってもう僕の音は出ないんだから」
元の音に戻すという事は間違いに気付いているのにそのまま作るという事だ。本気で作れば良くはなるが、教科書通りの音にしかならない。ようやく原田の根幹が見えてきた。
「僕はね。自分で考えて何かをしたいんだよ。でもね、何をやってもマニュアル通りにやれば上手くいってね。それって楽しいかい？だったら機械で十分じゃないか。新しく何かをやり遂げる事さえ機械に負けてしまったら、人は何でなら機械に勝てるんだい？」
私の生き方が否定されている気分だ。不意に目を逸らしてしまう。
「ああ、ごめんよ。君を否定しているわけじゃないんだ。ただ、僕は人生の全てを機械に決められたくない。自分で選びたいんだ」

急に感情を移入してしまうようになった。得体の知れなさがなくなったからだろうか。それとも同情だろうか。

「君は医者になるのに才能は要らないと言ったね。努力出来るのも立派な才能だ。それに、医者になった後は才能が物を言うんじゃないのかい？」

考えた事がなかった。私はいつしか医者になる事をゴールとして考えていた。今思えば、自分が医者になって、患者を治療している姿すら想像が出来ない。

「君は医者になりたいのかい？それとも幸せになりたいのかい？」

「……なあ、お前には幸せって何だか分かっているのか？」

今では、こんな恥ずかしい質問もプライドが邪魔しない。

「分からないなあ。それを必死に探しているよ。でもね、僕は他人に幸せだねって言ってもらえたところで幸せだとは感じないよ」

原田でも分からないらしい。だが、原田の返答には続きがあった。

「でもね、昼間の星みたいな物だと思っているよ。どう頑張っても見えはしないし掴めもしないけど、確かにそこにあるんだ。そして、一つじゃない」

分かりはしないが、何かのピースがはまった気がした。

家に帰ってもう一度、職業適性を見る。医者以外のページを凝視する。やはり、幸せになれる確率が高いのは医者だ。だが、では幸せとは何なのか。それをマニュアルに聞いたところで納得

のいく答えはなかった。金に困らず、いい人と結婚して子供を産んで、皆健康で……。分かる。その為に安定して、高収入の職業が望ましいという事も分かる。だが、この心に落ちた影が何の影なのか分からない。今回は会った事による不快感はなかったが、原田と会う度に、心に出来た靄が成長する。

起業家か。複数人で立ち上げたとしてもリーダーが向いているとある。確かに原田はリーダー向きではなかったな。

「また、それを見ているのか。起業家？あんなに医者になりたいと言っていたのに」

父が後ろに立っていた。今考えると、私は医者になりたいと父に言った事があっただろうか。いや、本気でなりたいと思った事が一度でもあっただろうか。そう思うと新たな疑問が生じた。

「お父さんは私に幸せになって欲しいのですか？それとも医者になって欲しいのですか？」

「急に何を言い出すんだ。両方だ」

「では、もし私が医者にならないと言ったら、どうしますか？」

「私が納得する理由を用意してもらう。子を幸せにする事も親の務めだ」

この人はマニュアルの言う通りにしていたら幸せになったのではなく、マニュアルでしか動けないのだろうな。

そして、私は父の背中を追い掛けていたのではなく、父と同じ道を通っていただけだった。私は車でしかなかったのだろうな。父に運転されるだけの。ガソリンは何だったのだろうか。それに気付いた途端、急に脱力感があった。

「色々と思う事があるかもしれないが、このまま頑張りなさい。そうすれば母さんも喜ぶ。あんなに医者になりたがっていた時の事を思い出しなさい」
「お父さんは時計を見た事がありますか？」
思った通り、キョトンとしていた。

「やあ、おはよう」
「おはよう。朝のバスにまで来るとは思わなかったよ」
無意識に挨拶を返す。あれからこのバス停が気まずくなり、時刻のギリギリに着くようにしていた。すぐにバスが来るだろう。
「今日、君に推薦が承認される。先に伝えておかないとと思ってね」
なぜだろう。それを目標としていたのに、不思議と嬉しくない。
「なあ、一つ教えてくれ。お前の父親は幸せだったのか？」
「そんな事を聞いてくれるようになるとはね。嬉しいよ。本来の君なら不幸の一言で片付けたはずだ。だって、お金がなくて、妻には逃げられて、病気で早死にして。どう考えたって幸せのはずがない。でもね、死んだ時の顔は穏やかだったよ。あんな顔は初めて見た。そして、引き出しからは母さんの写真と、コンクールで賞を取った時の僕の写真が出てきた。ただ、それだけだよ」
「そうか」

自分から聞いておいてその程度の感想しか言えなかったが、心の靄が晴れ、視界が広がった気がする。ゆっくりバスが近づいてきた。

「僕はもう行くよ。ちょっと予定があってね。よく考えてくれ」

なぜ急いでいるか知りたかったが、私は予備校に向かわなければいけない。それに、結論を出さなければいけない。

予備校から出る。

太陽は真上から私の影を消す勢いで照り付ける。汗はその小さな陰に入り切る量ではない。冷汗も混じっているからだ。私は推薦願いを取り下げた。そして、こんなに早く授業も受けずに出てきた。

「やあ」

原田がいた。あまり汗をかいていない。少し前までエアコンの効いたところにでもいたのだろう。

「私が逃げ帰る事までお見通しか」

実際に逃げた。父には何の相談も出来なかったし、中島にも話していない。中島は鬼の形相で私を探していた。おそらく、中島に推薦を譲るために辞退したとでも思ったのだろう。

「先読みの力は重要だ。それに君の方が先読みの力はすごいよ。医学部の推薦を蹴ってくれたのかな？でも、まだ悩んでいる」

「そうだ。簡単に医者を諦めるわけにもいかない。考える時間を作っただけだ。お前の話を聞かせてもらおう。手伝うかはそれ次第だ」
「手伝うんじゃないよ。そうなったら君がリーダーだ。まあ、いいや。美味しいコーヒーが飲めるところがある。行こうか」
原田について行く。普段はあまりコーヒーを飲まないのだが。

一言で言うと、すごい。原田は起業について学ぶために地方の大学に行くと言ったが、そんな事しなくても、今すぐ起業出来るのではないかとさえ思える。聞いていて私も勉強になった。
今朝急いでいたのは、その大学への準備らしい。思った以上にお金が掛かるため、父の形見であったバイオリンを知人に売ったと。奨学金でも借りればいいのだが、原田はそのバイオリンを資金にする事に意味があると言った。私には理解が出来ない。
「とりあえず、一回君の意見を聞きたいな」
そう言って、原田はここでようやくコーヒーを手にする。ずっと話していたため、原田はまだカップに口を付けていなかった。
「ここまで考えていたとは驚いた。正直、お前を頭がおかしい奴だと思っていたよ。私の方が優れているなんてとても思えない」
「君は自分を過小評価し過ぎだよ。Sランク君。君は起業して世界の中心になれる可能性を秘めているんだ」

「成功が約束されているなら、私は医者より起業したい。ただ、私は幸せになりたいんだ。起業に成功すれば医者になった時より幸せだろう。だが、失敗は怖い」
「馬鹿だな。成功が約束されてないから面白いんじゃないか。僕は幸せになりたいわけじゃない。この人生を楽しみたいんだ。それが幸せってもんだろ。君はもう周りに幸せだねって言われても幸せにはなれないはずだ。何をしたい？それをよく考えるんだ」
原田がコーヒーを飲み干して言う。今までと違い皮肉ではない。

取りあえず帰路につく。バス停までまた歩かなければならない。
「分かった。私は医学部を受ける。お前は予定通りそちらの大学に行け。そこで成功すると確信したら呼んでほしい。すぐに医学部を辞める。だが、逆に確信が持てなかったら、その時は諦めろ。私はそのまま普通の幸せを目指す。それが今出せる最大限の結論だ」
原田は笑う。本当にうれしそうだ。まるで子供だ。
「そのパターンか。いいよ。逃げ道を作るのは普通だ。むしろ、格好つけて命綱を付けない馬鹿は死ぬ。起業する段階ではSランクが味方に付く。そんな心強い事はないよ」
原田が少し走って私の前に行く。
「さあ、僕と一緒に世界を作ろう」
振り返ってそう言った原田に、トラックが突っ込んだ。
宙を舞うような大げさな動きはなく、ただトラックの下に消えた。トラックはそのまま進み、

原田を吐き出した後ようやく止まる。駆け寄って原田に声を掛けてみるが、ピクリとも動かない。一見、外傷は見当たらないのだが、生暖かい鉄の匂いが鼻を刺す。
「触らないで」
救急車から人が下りてくる。たまたま通りかかっていたらしい。
不幸中の幸いという事か。すぐに運ばれていった。

死んでしまうらしい。
現代医学でも治せる可能性がない。むしろ、今意識がある事が奇跡だという。最期に話す時間を与えられた。親戚に優先させるべきだろうが到着が遅く、連絡しておいた中島はすぐに来た。
一時、静寂が病室を支配していたが、ベッドの上の原田が先に口を開く。三人の中では最も表情が柔らかい。
「君は僕がいなくなっても起業する意思はあるかい？僕は夢を叶えられそうにないよ。天国の親父に見えるぐらい大きな会社を作りたかったんだけどな」
「もちろんだ。お前にも見えるぐらい大きい物を作ってやるよ。……なんて言うとでも思ったか？ふざけるな。散々人を夢だ何だと煽っておいて、お前はここで死ぬのか？冗談じゃない」
行き場のない怒りを原田にぶつけているのは分かっている。八つ当たりだ。だが、こうしないと、私まで壊れてしまいそうだ。
「おっ、おい。何をしてるんだ？」

スマホを高速で操作する私に、中島が問い掛ける。今は手段を選んでいる場合ではないのだ。
「この大学病院の教授たちのパソコンに侵入している。その状態でマニュアルに聞けば突破口があるかもしれない」
「犯罪だぞ」
中島が病院だという事も忘れて声を荒げる。
だが、仕方がないだろう。人ひとりの命が懸かっている。この大学病院の施設とパソコンを総動員して計算すれば、突破口があるかもしれない。あの医者が思い付かなかった突破口が。
「そんな事言っている場合か」
別に中島を説得する気はない。邪魔をするなと言っているだけだ。
急に体が固まる。侵入は成功した。後は検索するだけだ。だが、指が動かない。声での検索も出来ない。法律を犯してしまうからではなく、謎の恐怖に襲われて体が竦んでしまった様な状態だ。
怖い。いったい私の体はどうしてしまったのだろうか。
「君が賢いからだよ。気付いちゃったんだ」
何も分からない私に原田が教えてくれる。
「僕はもうすぐ死ぬ。もし、治療法があったとしても、僕の死が先だ。だったら検索ワードは『死んだ人間を生き返らせる方法』にしないといけない。こんな時代だ。もしかしたら既にその技術はあるのかもしれない。でもね、それだけは絶対にやったら駄目だ」

死ぬ前だと言うのに、私の選択肢を無くす程、力強く言い切る。
死んだ人間を生き返らせる。この時代において、もう技術的には難しくないのかもしれない。ただ、人の心がそれを許さない。人がそれを望む以上に。このマニュアルに支配された世界で、人の心が生きている証拠である気がした。
「僕は一度、君は機械なのかと聞いたね。でもね。君はちゃんと心で動いていたんだよ。僕は最期にそれが分かって嬉しいよ」
そんな事を言われたら――。私に出来る事はもう何もない。
「私は起業したい」
気付けばそう言っていた。だが、本心から出た言葉だ。軽い気持ちで口にしたわけではない。それを聞いて、原田が微笑む。
「それだと、君が医者になるのは難しくなるよ。自分で起業のための勉強をしないといけない。本当にいいのかい？」
「いいんだ。私はお前を救えない現代医学に失望した。普通なら自分が変えるとか思わないといけないんだろうが、そんな気は起きなかった。それに毎回こんな気分になるのは嫌だ」
「だったら僕の資金を貰って欲しい。入学金ぐらいにはなる」
「受け取れない。そんなに金には困ってない」
父の形見を売って作ったお金など、たとえ困っていたとしても受け取れない。だが、原田は意地でも渡す気でいるようだ。

「起業しなかったら募金にでも回してくれたらいい。今から死ぬ人間にお金はいらないよ。身寄りもないしね」
「……分かった。有効活用させてもらう」
実際にどうするかは別として、今はそんな話をする局面ではない。
一度、会話が止まると、急に頭の中でピースがはまり始めた。
「お前が話していた村の話。やっと意味が分かったよ。分身ってのは皆が思い浮かべる平均的な幸せの事だろう。そこに辿り着けた者はもう自分ではない。諦めた者は社会から脱落する。諦めきれない者は自分で自分を殺してしまう」
もう死ぬというのに原田は笑顔だ。私はこんなに辛いというのに。
「そして、その事に気付いて別の幸せを目指す者も一人では生きていけない。お前が死んだら、私は一人になるんだが？」
「君なら……すぐに仲間が……」
私の最後の文句に返答し終わる前に心臓停止を告げる音が鳴る。実際に聞いてみると恐ろしく冷たい音だ。
「天国で待っていろ。私の会社を見せてやるから」
もう聞こえないと知りつつも、最後に伝えたい事を伝える。
「本当にいいのか？もし、少しでも俺に医学部の推薦を譲るためとか思っているんだったら、怒るぞ」

中島は私が歩む道を変える事が信じられないのだろう。
「違うよ。起業は私がしてみたいんだ。見ろよこの顔。生きているみたいだ。穏やかな表情しやがって。悲しめないだろ」
だが、なぜか涙が流れる。原田と会う度に成長していた靄は雨雲だったようだ。中島も泣いてはいるが、悲しい顔はしていない。
急に原田の家族が飛び込んできた。その中にはちょうど私の母と同じぐらいの年齢の女性もいた。なぜか安心した。
「出るぞ」
中島が静かだが有無を言わせない口調で言う。異論はない。だが、お金だけは渡そうとして、中島に止められた。それは原田がお前に託したお金だからと。では、入学金に使うしかないだろう。
外に出ると驚くほど空気が澄んでいた。今なら星が見えるかもしれないとさえ思える。だが、太陽は明る過ぎだ。
電話が鳴る。父だろう。推薦を蹴った事で連絡が行ったのだろうか。そう言えば、父とまともに話すのは初めてかもしれない。
「もしもし、お父さん。あなたを納得させる理由が出来ましたよ」
勇み足で話し始める。
空に手を伸ばす。星はまだ見えもしなければ、届きもしない。ただ、広くて自由だ。

一方、中島は職場に戻る。公務員だが、非公表の職種だ。自分の椅子に全体重を掛ける。ここにいる時は何も偽らなくていい。

「お疲れ。やっと今月は二人目クリアだね」

死んだはずの原田が向かいの席から話しかける。作り笑いはない。

「お疲れ。流石に今回は焦ったな。まさか、スマホで病院のコンピュータを乗っ取るんだもんな。IT系でSランクともなれば、流石に化物だぜ。あそこで何も考えず、『原田を救う方法』なんてやられてたら、仮病がばれて終わりだった」

中島は背もたれに体を預け、天井を向いたまま話す。

「やっぱり、布団の中にスマホ入れといて良かったよ。すぐに追加のマニュアルが読めたからね」

「ああ、あれ。あの『人を生き返らせてはいけない』ってやつ。俺、感動したよ。あそこで踏みとどまれた赤尾を俺は尊敬するよ」

中島は体を起こし、自分の好きな映画を語るような口調で話す。だが、原田はそこまで興味が無いようで、薄い反応しか示さない。

「まあ、僕のマニュアルが出した文章のおかげだけどね。あと、村の話もそういう事だったんだっ

ていう。僕も理解出来なかったのに」
急に中島は真剣な顔をし、声のトーンを落とす。
「俺、時々怖くなるんだ。マニュアルのせいでリスクの高い職業を目指す人が減った。その結果、国が一芝居打って適性のある人をそういう職種に就かせる制度が出来る。資金援助までしてな。そこまでは簡単な話だ。だが、その騙す側の俺たちでさえ、マニュアルの台本で動いている。人を動かし、世界の流れすら変える。マニュアルはもう神と同じ存在だ」
「でも、僕はその神様のおかげで公務員になれたんだ。もともと役者にAランクしかなかったんだよ？」
中島の本音の話にすら興味を示さない原田に、中島は皮肉を言う。
「お前って、なんだかんだでこの仕事大好きだよな」
原田は別に好きってわけじゃないけどと先に付け加えて言った。
「まあ、安定だよね。父さんも喜んでいるよ」

（工学部機械システム工学科二年）

選考を終えて

総評　今なぜ小説か——書き続けること

選考委員長　岩岡　中正

最初に少し、「今なぜ小説か」についてふれます。

「はじめにことばありき」と言いますが、ことばはすべての原点です。ところが今や、政治、経済、文化、生活の一切が「はじめに数値ありき」と言わんばかりの時代になりました。今や、一切の経済化、情報化、数値信仰の中で、ことばもそれを支える主体性や創造性も、ことばがつくりあげる社会も、崩壊の危機にあります。

この一人一人の真の感動や幸福から乖離した空疎な記号としてのことばの支配に対抗するためには、いま私たちが自分自身で自分の言葉を取り戻し、自分の世界を創造し、これを伝えていく以外にありません。ものを書くことには、そうした意味があるのです。

今日、大学でも「教養の崩壊」が言われて久しいのですが、私はこの「東光原文学賞」は、いわば「教養の再興」のために設けられたと思っています。小説で自分の世界をつくり他者に伝え

ることで、ことばのもつ創造性や主体性を回復することが狙いです。この賞も今回で七回目を迎えますが、全体として応募者数も迫力もやや低下し始めていないか懸念します。これが、一切の情報化や数値化のなかで、ことばや議論や考えることさえ不必要と思いはじめたごく最近の時代風潮と無縁であれば幸いです。あるいは、この賞が七回を経て、学内の書き手はひとあたり出尽くしたのかもしれません。とすれば、これから主催者には応募を待つのではなく掘り起こす努力が必要ですし、学生の皆さんは奮って書き続け応募することが必要です。まるで走り続けなければ倒れてしまう自転車のように書き続けなければ、生きていけない表現者が、一人でも二人でも本学から出ることを期待します。最近、ある著名な歌人が受賞式で受賞者を称賛して次の様に言ったことを思い出します。「短歌を詠(よ)む人は多いが、短歌を詠まなければ生きていけない人は少ない。あなたは、その数少ない一人です。」というものですが、これは表現者にとって、最高の賛辞であります。

今回の受賞作ですが、もちろん表現にミスがあったり生硬な箇所もありましたが、どれも地味ですが自分の思いを忠実に表現し構成する努力と姿勢において優れていました。よく考えて熱心に取り組んでおられる姿勢が良いと思いました。他方入賞しなかった作品には、視野が狭く、ややひとり合点のものもあって、もう少し客観化すれば読者の共感が得られたのではないかと思います。応募作全体としていえば、刮目させるようなパワーをやや欠いたという印象です。

そこで大賞の「灰燼の記」ですが、これは高校生と、偶然知り合ったまだ若い病人及びその弟や叔母との交流を通して、正面から死を見つめた丁寧なエッセーです。テーマやストーリー自体

は必ずしも目新しくはありませんが、全体として繊細で丁寧な眼差と抑制されたたたみかけるような筆致が良く、どこか風格のある説得的な小説です。細部までよく描かれていて、日記を交えた構成もしっかりしており、真剣でどこか古風な趣のある作品でした。

優秀賞の「御伽草子、橋姫の項」は、人間の心にひそむ妬心から生まれた妖怪・橋姫を成仏させる僧の物語で、テーマはややありがちですが、ことばづかいも展開も自然で、読ませる力があります。橋姫と女童の挿話も入れた構成に工夫もあり、ことばの力による魂の再生・成仏というメッセージ性もある魅力的な作品です。自分でも楽しんで書いている感じが伝わってくる好作品です。

優秀賞の「わが親愛なるあなたへ」は、テーマはややありがちな姉恋物語ですが、一気に書いた勢いがあって、いかにも若々しいと思いました。誰の中にもあるこのような感情をすっと出して見せた率直さと、これをテンポ良く読ませて納得させる軽やかな筆力に注目しました。

優秀賞の「昼間の星の陰で」は、本当の自分の幸せは何か、自分が自分らしくあるためにという視点から、神格化されたマニュアルの時代の病を、若者らしい真剣さで問い詰めています。時折やや生硬な表現や、末尾部分がやや複雑でリアリティを欠くところもありますが、自我の葛藤や時代風潮への懐疑がよく描かれていると思いました。

最後に、この受賞を機に、さらに皆さんが表現する楽しさに目覚めて書き続けられることを、心から望みます。

●岩岡　中正（いわおか・なかまさ）

熊本大学名誉教授、俳誌「阿蘇」主宰。㈳日本伝統俳句協会理事。著書に『詩の政治学―イギリス・ロマン主義政治思想研究』（木鐸社、１９９０）、『転換期の俳句と思想』（朝日新聞社、２００２）『石牟礼道子の世界』（編著、弦書房、２００６）、『ロマン主義から石牟礼道子へ』（木鐸社、２００７）、『虚子と現代』（角川書店、２０１０）で第11回山本健吉文学賞・評論部門。『子規と現代』（ふらんす堂、２０１３）。句集『春雪』（ふらんす堂、２００８）で、第50回熊日文学賞。『夏薊』（ふらんす堂、２０１１）。

講評　錐のような作品を

選考委員　高峰　武

書く、という行為にはいろんな意味づけがなされるが、大きな要素としては自己発見ということがあろう。何かに感動した、あるいは何かを訴えたい、そしてそれを伝えたい。伝える相手が特定の場合もあれば、不特定の場合もある。こうした感情、思考こそ人が人たる所以である。

小説というのは、これらをベースにストーリーを付け、構成を考えるものだ。虚構ではあるが、普遍性を持った時に、瞬時に虚構を超えて文学となる。そんな作品に出合いたい。そう思いながら、選考に当たらせてもらった。

今回の東光原文学賞の大賞となった「灰塵の記」は生と死がテーマであるが、眼差しの優しさが抑制された文章のなかに埋め込まれているようで好感が持て、大賞に推した。

比喩の使い方も効果的だった。早鳴きの蝉の死骸をめぐる描写も上手で、「夏は生命の季節だけでもない」という表現もよかった。一方で、抜け殻は死の意味だけではなく、そこから抜け出した蝉が新たな生命の誕生でもあることを指摘して、「希望の象徴」とするのも効果的だった。

何か所か、生硬な言葉の使い方が目立ち、もう少し丁寧に言葉を吟味した方がいいような個所があったのは残念だった。

「御伽草子、橋姫の項。」は、時代物である。嫉妬心から生まれた妖怪を成仏させる僧の話だ

が、応募作の中では最も小説らしい小説だった。構成にも工夫がみられ、ストーリー性も高かったが、オリジナリティーという点で、既視感があったのが残念だった。

「我が親愛なるあなたへ」は血のつながりのない姉と弟の心の動きが巧みに表現されていた。ややオーバーで生硬とも思われる表現もあったが、全体として文章に勢いがあった。特に姉の心情表現は独自の雰囲気を持っていた。

「昼間の星の陰で」は、若者の自分探し、生き方探しということがテーマであろうか。テーマそのものはそう目新しいものではないが、「自分のことを知られているという敗北感を感じる」「空に手を伸ばす。星はまだ見えもしなければ、届きもしない。ただ、広くて自由だ」などという表現が新鮮だった。もう少し推敲を重ねていけば、完成度が上がったのではないか。

審査を終えて感じたことは、昨年より少々パワーダウンしたのではないか、ということだった。若さは特権でもある。表現に遠慮は不要だ。錐のようにぐいぐいと入り込むような作品を期待したい。昨年も指摘したことだが、変換ミスと思われるものが少なからず散見された。誤字、脱字の防止は表現者にとってはイロハのイだろう。それから、推敲ということも書く上では大切な行為で、ぜひ忘れないようにしてほしい。

●高峰　武（たかみね・たけし）

熊本日日新聞社常務取締役。早稲田大学第一文学部仏文科卒。１９７６年、熊本日日新聞社入社、１９９１年東京支社編集部長兼論説委員、１９９９年社会部長兼論説委員、２００５年編集局長、２００８年論説委員長、２０１４年６月から現職。著書・共著に「ルポ精神医療」（日本評論社）、「巨大ダムに揺れる子守唄の村」（新風舎文庫）、「新版検証・免田事件」（現代人文社）、「検証ハンセン病史」（河出書房新社）、報道写真集「水俣病50年」（熊日情報文化センター）、「水俣病小史」（熊日情報文化センター）、「原田正純追悼集　この道を―水俣から」（熊本日日新聞社）。連載「ルポ精神医療」と連載「検証ハンセン病史」は日本新聞協会賞受賞。

なぜ小説を読むのか、なぜ人は小説を書くのか

選考委員　西山　忠男

若い人が書物を読まないという嘆きが世にはびこる中、東光原文学賞に多くの本学学生さんが作品を寄せて下さったことを率直に嬉しく思います。小説の喜びとは何でしょう？私はかつて次のような文章を書いたことがあります。

小説を読むとは、別の人生を生きることに等しい。ジャン・バルジャンになって、奇跡の神父に出会う驚き*。ダーバヴィル家のテスとなって、悲劇の人生を辿るスリル**。あるいはスイスの中年古典語学教師とともに、リスボンへ知られざるレジスタンス闘士の生き様を探る旅に出る感興***。それがたとえ実人生とは異なる架空の人生であっても、そこに何がしかの真実が含まれていればこそ、人は自分とは異なる人生を体験しているような喜びを味わうことができる。小説を読むことで人は何倍もの人生を生きる。生きたい。だから人は小説を読む。

かくのごとく小説を読むことは、他者の人生の追体験。一方、小説を書くことは、たとえ歴史

小説であっても、自分の人生の投影をなすことである。小説を書くことで、人は新たな人生を創造する。それは何よりも彼（彼女）のための新しい人生。書き終わった時、彼（彼女）は全く別の人生を生きた感慨を抱くであろう。もっと生きたい。だから人は小説を書く。

今回応募して下さった学生さんたちは、無意識であろうともこのように新しい人生を創造されたのだと思います。そのことに敬意を表します。

大賞に選ばれた「灰塵の記」は、印象的な書き出しで始まり、話の展開に興味をそそられました。死にゆく者の葛藤が良く描かれており、応募作品の中で最も感動的な作品でした。一人称から日記への展開があり、構成にも工夫が見られましたが、話者が混在しているような文体になっている箇所があり、難点もあります。タイトルの「灰塵」は「灰燼」の方が内容にふさわしいでしょう。全体的に小説らしく仕上がっている点を評価しました。

「御伽草子、橋姫の項」は小説としての構想力が優れています。すべての作品の中で最も小説らしい小説と言えるでしょう。構成にも工夫が見られ、完成度が高く、何より読んでいて面白い。ストーリー自体はどこかで聞いたり読んだりしたことがあるような既視感はありますが、作者のオリジナルな発想でしょう。幸という脇役の存在感もあり、文体も好感が持てます。私はこの作品を最優秀として推しました。

「我が親愛なるあなたへ」は、小説というよりは身辺雑記に近い作品と言えるかもしれません。上記二作を除いて他の作品にはすべて同じ批判が当てはまる中で、これは比較的内容がある点を

評価しました。再婚家族の物語ですが、血のつながりのない姉と弟の微妙な関係が上手に描かれている点は評価できます。ある種のシスターコンプレックスを描いた作品で、幼いという評価もできますが、人はそのような経験を通して成長していくものでしょう。

「昼間の星の陰で」は、自分らしく生きたいという若者の迷いを描いた作品で、マニュアル人間への抗いという現代的なテーマを含んでいます。作品中に出てくる「不思議な村」の話は作品に小説らしい奥行きを与えています。この挿話がなければ、私小説の域を出なかったでしょう。一方、交通事故で突然登場人物がなくなる件（くだり）や仮病の話などは、現実味が感じられず作りすぎの感があります。

選に漏れた作品の中にも良いものはありました。

「Yeah…」は現代の寓話としての面白さが感じられる作品でした。比較的小説らしくできている点を評価しましたが、難点もあります。友人の名前「陸奥」が後半では「睦」に変わっているなど基本的なミスがあります。また「老婆の最後の言葉」が重要な意味を持っているはずですが、それは聞き取れなかったことになっていて、作者の意図がつかめません。タイトルの意味も不明です。タイトルは作品を象徴するものなので、十分に考えてつけるべきです。

小説の評価は多分に主観的なものです。賞を取るために小説を書くのではありません。上に述べたように新しい人生を生きるために書くのです。今回応募されたすべての皆さんが、この喜びを生涯持ち続けられることを祈念いたします。

*ヴィクトル・ユーゴー「レミゼラブル」
**トーマス・ハーディー「テス」
***パスカル・メルシェ「リスボンへの夜行列車」

●西山　忠男（にしやま・ただお）
熊本大学大学院自然科学研究科教授
岩石学の専門に関わる著作以外に、創作として「オラビ瀬の洞門」（櫂歌書房、２００３）、「孤峰の蝶」（文芸社、２００４）がある。

第七回熊本大学東光原文学賞作品集

発行日　二〇一五年三月三十一日

編集・発行　熊本大学附属図書館
〒八六〇―八五五五
熊本県熊本市中央区
黒髪二―四〇―一

印　刷　株式会社かもめ印刷